
アクショントリガー

向笠種蒔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アクシオントリガー

【Nコード】

N2195M

【作者名】

向笠種蒔

【あらすじ】

世界中の電子機能を壊滅までに追い込んだ太陽嵐から十五年。特殊電磁場の塊である黒い空。擬似天体に照らされた大地。進化する科学技術の中、決して己を省みず、ただ自らの幸福にのみ固執する人類。その、さなか。特殊電磁場を動力として起動するヒト拡張型装甲兵器MEIRメイルを伴い、少年の世界は胎動する。全てはあの日見たままに。真実から目を逸らし続ける人を、人たちを、革新に導く為に。この世界はまだ、完結していないのだから。

1 少年はたゆたう

「考えることを止めてしまったら、自分が自分じゃなくなるような気がして」

少年は呟く。嘆く。誰にも聞こえないように、小さな小さな声で。神童。

道行く人は少年をそう呼ぶ。そう崇める。そう縋る。人は自らより優れた人に対して、そう処理する。あるいは嫉妬する。敵とみなす。そうするしかないのだ、人は。

だけど、それを認めることは出来ない。

「そうは思わないかい」

神の子だと言うのならば。

その神は、一体どこで何をしているのだろう。

その親は、一体どこで何をしているのだろう。

神とは人の幸福のために存在するのではないのか。だとしたら、全ての人が幸せになれないのはなぜか。

「分かつてはいるんだけどね」

答えは分かっていた。

苦勞せずとも、努力をせずとも、少年には辿り着けた。手にすることが出来た。答えを導き出すことなど簡単だ。答えじゃない全てを取り除けばいいのだから、少年にとっては呼吸することと大差がない。正解はいつだって一つしかないのだ。

神様に縋って、他人に求めて、機械に委ね、正当化し、正義と信じ疑わず、うわべだけの言葉を交わす。人の生き方だ。生き様だ。

ひよつとすればこんなことすら人は何にも分からないのかもしれない。

弱いから、だろうか。

だとしても。

醜い。

大人は少年を神童と言う。天才と褒める。自分だけは少年のことを理解できると言う。自分だけが少年を育ててきたのだと言う。そうやって人と比べて、自分をより優れていると見せたがる。それが人か。人ならば。自分は人ではないのかもしれない。

「我ながら下らないと思うよ」

暗黒の空が、太陽を覆い隠していた。雲のように空を覆うそれは、俗に電磁斥力と呼ばれるエネルギー体。

電磁斥力によって作り出される、エネルギーの空。地上を照らす擬似天体。

人類の進化だという。文明の勝利だという。これこそが人の知恵だという。

「こんなものが進化だというなら」

何かに苛立っていた。

少年にとって、目にする全ては敵だった。

遙か昔、美しいと言われた星で。

少年の味方は、少年だけだったのだ。

「俺は絶対に認めない」

1 少年はたゆたう

社会のルールその一。

空気を読まなければならない。

例えば自習の時間に、真面目に勉強などしたら後ろ指を差されることになる。集団行動において、集団にあわせないのは自殺行為である。

社会のルールその二。

上下関係を正確に把握し、トップの人間が不快と思うような行動をとってはならない。

例えばこの教室で、一番目立っている住吉スミヨシ斎イッキより目立つ行動は控えなければならない。どれほど能力が優れていようと、彼よりは優れていないように見せなければ集団から弾かれることになる。

社会のルールその三。

事実は言葉にしてはならない。

どれほど正確な事実であろうと、オブラートオブラートに包むべきである。

正直なことは美德であるが正解でない。

社会のルールその四。

相手を思いやる振りをすること。相手が嫌いでも、嫌いでない振りをする。それが現代で生き残るために必要なルールだ。そのルールに則れない場合は、どんな苦難をも受け入れる必要があるらしい。少年は気が狂いそうだった。なぜそうまでして他人と関わり合わ

なければならぬのだろうか？　まるで嫌なことを無理矢理していて、それが美しいとも思っている愚者のようだ。

端的に言って、エネルギー効率が悪い。

ところで、現在の電磁場エネルギーを利用した機器はかつてエネルギー効率最強と言われていた二輪自転車のおよそ二倍、特殊な油を使用した昔の自動車の三分の一ほどのエネルギー効率で移動できる。

しかし使う人間がこうも愚かだと、呆れるしかない。道具は道具でしかないのだろう。彼らはその道具を使いこなせない。結局、人は進化できないのだ。

結論と同時に、五時間目の終わりを告げるチャイムが鳴り響く。

「日雀くん。後ほど職員室まで来て下さい。進路についての話があります」

社会の教員に従って、ヒガラ・シュン日雀隼は机の脇にかけてある鞆を手にとった。

「電磁斥力の学問に進みたいそうだけど、君の成績ならGESへの進学も可能だよ。君の将来のために、そちらの方をオススメしたいんだけど」

この中学校から、わずかでもGESへの進学率を上げておきたいということだろう。ひいては教師自身の評価にも繋がる。

社会のルールその三だ。

「すみません、僕としては電磁斥力の方に興味があるので、既に合格通知もいただいていることですし、せっかくのお申し出ですが」「ああ、いいんだ。気にしないでくれ。ただ、君ならば、と思って

ね」

何が『君ならば』だ。自分のことしか考えていないのに、人のことを考えているとも言うのか。そう考えつつも、しかし隼はさわやかな笑顔に憎悪を内包した。

それは完璧な笑顔だった。優等生にふさわしい、綺麗な笑顔である。人当たりの良い、誰もが優しそうだと思う笑顔。

その四。社会のルールその四である。

「考えが変わったら、僕の方からお申し出させていただきます。そのときはよろしくおねがいます」

「うん、よろしくたのむよ。あと二週間くらいは間に合うから、それまでにね」

現実是非情ではない。

非常に人間らしい感情に溢れている。溢れかえっているくらいだ。自己利益。保身。優越感。満足。そういった非情は悪ではない。その強制が悪なのだ。だが、それを理解できない者が暗黙のルールに反し、集団から追いやられる。

そうして集団から溢れ出た人間は、レットルによって地の底へ叩き落されるのだ。

優しさ？

思いやり？

そんなものは地域通貨に過ぎない。俗語である。一部でしか通用しないのだ。自分の敵に対する優しさなんてものは、存在しない。それは本当に優しさと言えるのか？ 自分に優しいだけだろう。

隼は苛立って、職員室のドアをバカ丁寧に閉めてやった。

「あ、日雀くん。先生からの用事ってなんだったの？」

眼鏡越しの視界が、新たな現実を映す。

制服左胸の名札には『荒崎ひなた』と書かれてあった。そういえば今朝のニュースでは、最近ひらがなの名前が流行している、と言っていたが　１５年前に名づけられたであろう名前に、『最近』を求めるのはおかしいなと隼は考え直す。

これも風潮。かつてはカタカナや、おおそ日本語とは思えない名前に漢字を当てはめてアイデンティティを強調していたらしい。大人になりきれない親のエゴだろう。

「いや、進学手続きの書類に不備があつてね。漢字の書き間違いをしてしまったみたいで」

「あはは、日雀くんらしいね。でも成績いいのに、GESには進学しないの？」

「とてもじゃないけど、俺には出来ないよ。荒崎さんこそ、GESには？」

嘘だらけの言葉を交わしながら、嘘だらけの笑顔を浮かべる。それは彼女も同じだ。

彼女の笑顔。裏にはどのような感情が隠されているのだろうか？

嫉妬？ 羨望？ 憎悪？

あるいは別の何かだろうか。

「私も無理かなあ……高校生になってからGESの試験を受けるつもり。でも、日雀くんが無理だなんて、今年は誰も行けないんじゃない？」

「そんなことないよ。住吉くんは行くんじゃないっけ」

「住吉くんが？　へえ、意外！　住吉くん、運動できるのは知っていたけど、勉強まで？」

親のコネだよ。知っているだろう。

のどまで出かけたその言葉をぐつと飲み込んで、当たり前障りの無い『正解』を返す。

「勉強もできるんじゃないかな？ ほら、何でも出来そうなイメージがあるし」

その二とその三。

「ああ、確かにそんなイメージあるよねー」

「だよ。それじゃあ、俺はこれから先生の手伝いに行かなくちゃならないから、これで。また明日」

「え？ あ、引き止めちゃった？ ごめんね、また明日！」

笑顔というのは、便利なものだ。

笑うだけでいいのだから。心のうちがどうだろうと、外面が笑っているように見えれば、それは笑っているのだ。

ただ筋肉を動かしているだけでも、笑顔になるのは簡単だ。バカはそれだけで簡単に騙されてくれる。

「我ながら下らないよ」

隼は駆け足で階段を下りた。

外の世界は幼い頃とまるで変わらない。

あの日見たままの空。あの日見たままの世界。全てがあの日見たままだ。

あの日。

政治家たちは、太陽を取り戻すと言ってはいなかったか。はびこるエネルギー問題を解決するとは言っていなかったか。政権公約は守るべきものではないのか。

それが、どうして。

何も変わっていないのか。

黒い空。

雲はない。

黒い空である。

擬似天体によつて、室内ほどの明るさを保っているだけの、はりぼての世界。

特殊電磁場による斥力エネルギーが地球を覆っている。人を見下ろす。隼にはそれらがまるで、あざ笑っているかのように見えた。

『お前たちは、所詮籠の中の鳥でしかない』

そして永遠に、黒い空の下に押さえつけられたまま。
飛び上がる翼など、お前たちには最初から存在していないのだ。

「上等だ」

幸運にも、まわりには誰もいなかった。

「レッテル張りはうんざりなんだよ、神様」

ちょうど、そう隼が言った時。

擬似天体が揺らいた。明かりが点滅する。誰かが叫んで、大きな音がして、割れるような音と共に下駄箱に生徒の波が押し寄せて行く。

なんだ？

一人、門の前で佇む隼は。

空から降つて来る巨大な鋼色の人型機械に、目を奪われた。ビルと肩を並ばせ、大地を砕き、破壊活動を繰り返す無数の機械。10メートル行かないほどの身長だろうか？

それが、大地を駆けていた。

一心不乱に破壊活動を繰り返しているかのように見えたが、違う。鋼色の機械のほかに、白い人型の機械があった。

「……テロリスト？」

眼鏡に土ぼこりが付着する。自分が立っているのが不思議だった。視界とは別に、体が浮遊感に包まれる。自分を第三者視点から見ているような、そんな感覚。

笑っていた。

隼はいつの間にか、心の底から笑っていた。作り物ではない。

肉の動きではない。

心の動きに対応して、自然と湧き出る、笑みである。

しばらくして、再び黒の空から巨大な人型機械が降って来た。さきほど降って来た鋼色の角ばったフォルムとは違い、白くなめらかなフォルムである。両者で戦っているのだ。

持っているのは銃だろうか？

どのような動きをするのだろうか？

あれは、どんな仕組みで動いているのか？

隼は校舎の裏に潜む鋼色の人型機械をちらりと盗み見て、駆け出す。屋上だ。屋上なら飛び移れる。コックピットはどこだろうか？ ハッチの開閉ボタンは？

頭部にコックピットがあるようには見えない。小さすぎる。

ならば、胸部か腹部だろう。人型機械の四肢を制御するならそこが一番都合がいい。

人だかりの隙間を縫うように、隼は駆けた。階段を駆け上がる。だれかにぶつかった。だが、それもどうでもいいことだ。今となつては。

社会のルールなど通用のしない世界が、目の前にある。下らない世界から脱却できる。

屋上の扉を強引に開け放って、校舎裏にしゃがんで潜む機械の頭部へ飛び移る。迷いはなかった。好奇心が勝っていた。

靴をしっかりと肩にかけて、頭部から間接を掴みながら慎重に降りていく。

息を呑んだ。

動き出せば、自分の命は無いと思って良い。これほど不安定な場所で、しがみついていられるわけがない。

早くしなければ、動き出してしまうだろう。

ハッチはどこだ。

それらしい場所が見当たらない。背中をゆっくりと降りていく。

あった。溶接されたような、四角い隙間に囲まれた場所が。

開閉するスイッチは？ あるいはレバー。なんでもいい。

冷や汗が頬を伝い落ちるのが分かった。

まだ動かない。

いつ動き出すか分からない。

緊張していた。

今に死ぬかもしれないのだ。

緊張しなかったら人間ではない。

ハッチを開閉する、それらしきものが見つからなかった。

どこにあるのだろうか？

外側から開かない？

まさか、そんな不完全な機械があつてたまるか。

ガクン、と地面が振動した。

違う。

動き出したのだ。

「うあっ」

かろうじて溶接された隙間につかまる。

このままでは犬死だ。

結局、神童と言われつつも、何一つ出来ない凡人に等しかった。それだけで、何にもならず、なせず、終わる。

脇役にすらなれない。

舞台にすら上がれない。

そんな人生で、いいのか？

進化と謳い、自分しか見えず、建前だけをかざす世界をただ呆然と眺めているだけの自分。

社会のルール。

納得が行くのか？

認めて良いのか？

これが完全であると。

全てあの目見たままに、あの目見た中で完結していたのだと。未来はありえないと。

いや。

そうするわけには、いかないのだ。

自分が自分である以上、何もしないでじっと耐え忍ぶことなど、決して出来はしないのだから。

だからこそ。

「俺は、認めない！」

ハッチを思い切り叩く。

運が良かったのだろうか。

それとも、運命と言った方が正確だろうか。

ハッチが、開いた。

「ん、なんだ、お前!？」

英語だ。なまりのない綺麗な英語。聞き取れた。間違いは無い。隼は鞆を中にいる人間に向けて投げた。それに準じてすばやくコックピットへ滑り込む。

不意を突かれたヘルメットの男は首根っこを掴まれ、座席から引きずり出される形になった。

「ふざけんな、この！　おい、やめろ、おい、何をする」

隼は男を無言で蹴飛ばし、ハッチの向こう側へ叩き落す。

死んだかどうかなど知ったことではない。なぜ殺したかなど考える必要は無い。

これは哲学の授業ではないのだ。倫理の講義でもない。議論の余地など存在しない。

戦争なのだから。

「ハッチを閉めるボタンは……これか？」

ハッチの脇にあったボタンを押すと、見事にハッチが閉まった。ガタン、と音がしてコックピットが傾く。隼は頭から座席へ落ちる形になった。

なるほど、コックピットと連動してハッチごと傾く仕様になっているらしい。頭をさすりながら隼は座席にしっかりと腰を据える。シートベルトがあった。ちゃんとしめないから引き摺り下ろされるんだと苦笑しながら呟いてみる。

両足に何かがフィットした感覚があった。

『言語エラー。英語から日本語へ変更します。神経接続共有エラー。フォーマットします。20、60、パーフェクト。神経情報を登録』

します。40、パーフェクト』

布団の中に足だけを入れているような妙な感覚がある。
続いて目の前にある二つのレバーを掴んだ。操縦桿のようなもの
だろう。

『神経接続共有エラー。フォーマットします。20、60、パーフェクト。神経情報を登録します。40、パーフェクト』

復唱と共に、全身が何かに包まれる。

神経接続共有？

まあ、難しいことはあとから考えればいいだろう。

『共有完了』

座席が消えた。

隼は腰を抜かしそうになったが、座席の感覚はあった。ふわりとした感覚に受け止められる。

『動作チェック、全てオールグリーン』

行ける。

小さい頃、神童と呼ばれていた。大人の都合で、妬みで、羨みで。才能があった。努力はしなかった。しなくても出来た。出来ないことはなかった。

少し考えるだけで、正解など簡単に分かった。
だから、できる。
行ける。

「この機械と搭乗者の名称は？」

『MHD - 035、アルファです。コードネームはMHD - 035、搭乗者の名称はセルゲイ・アマーノフ』

「状況は？」

『MHD - 036、037、共にロスト。EE側にやや有利。敵GES軍はナンバー03、05、08の三機をロストしています』

「この機体がどのようなシステムで出来ているかを確認できるか？」

『ノー』

「では味方の誰かと通信したい。そうだな、隊長と通信できるか？」

『イエス』

「やれ」

ざざ、とかすれた音がして、渋めの英語で声が返って来た。

『何の用だ、MHD - 035』

隼は咳払い一つせず、英語で返す。

「さきほどロストする直前、MHD - 036から通信が入りまして、こちらにGES側の人間が紛れ込んでいる、という情報を受け取りました。ひいてはご報告と共に、隊長にご確認したいことが」

『早急にしろ』

「はい。この機体のシステムについてです。答えられない場合は隊長と言えど、我が軍のために撃ち抜かせていただく所存です」

溜息が聞こえた。息を呑む。

緊張感があつた。生きている心地はしないが、隼は確かにこの状況を楽しんでいた。

『電磁斥力エネルギーを利用した最新鋭の兵器だ。名称はMHD。搭載されている武器は二つ、電磁レイザーとエネルギー・ボム』

「安心しました。他のメンバーにも念のため確認を？」

『取っておけ』

「了解」

通信終了。

再びざざ、とかすれた機械音がして、完全に音が消えた。機械の駆動音が体を通して伝わって来る。目を瞑る。

目の前にモニターは四つ。

前面、左右、背面を映している。

座席右側の壁についているのが、通信機器。無線機器だろう。あるいは最新鋭の機器なのかもしれない。

既に銃を持っているのは、確認している。これが電磁レーザー。

モニターから見限りでは、光線　ビームとさほど変わりが無い。不思議と笑みが止まらなかった。

「電磁斥力を利用した技術がここまで進んでいたなんて、知らなかったよ。GESに行くべきだったかな」

レーザーを構えてみる。腕の動かし方は分かった。ゆっくりと立ち上がる。右足を踏み出す。行ける。

『MHD - 035！　なにをしている！　早く狙撃しろ！』

「MHD - 035、了解。狙撃する」

モニターに照準が表示される。白い機体と、鋼色の機体。GESと、正体不明のテロリスト。どちらでも同じことだ。結局は全てを敵に回すことになるのだ。

レバーの内側。

照準をあわせる。

引き金を引いた。

黄金の光がレーザーの銃口から発される。反動はなかった。実感もなかった。だが確かに、鋼色の機体の胸部を貫いた。爆発が起こる。

『MHD - 035! ? くそ、なにをしているんだ! そっちは味方 』
「知っているよ」

隼は通信機器のレバースイッチを全て緑ランプにして、息を大きく吸い込んだ。

「こちらMHD - 035! そのGES、少し下がっている!」

地面を蹴る。

跳躍。

そのまま空中でレーザーの照準を敵MHD機に合わせ、引き金を引いた。

『待て! MHD - 035 』

爆発。

空中で反動をやりすごして、綺麗に校庭へ着地する。

MHD機は残り三機。

GES機は残り二機。

行ける。

『こちらGES! 援護に……援護に感謝する、MHD - 035!』
「情報が欲しい。僕が味方であることは分かっていただけだと思う」
『すまないがこちらにはその権限がない! この戦闘が終わった後、

君の待遇を保障しよう！』

「了解した」

MHD機がこちらへレーザーの照準を合わせて来たのが、モニター上に表示された。

再び跳躍し、そのレーザーをかわす。背面モニターにはビルを貫く光線が映し出されていた。

高層ビルの屋上に着地し、敵MHD機の背後に回る。

『この、裏切り者！』

レーザーの照準を敵機の地面にあわせ、二発発射。

土煙が舞う。周辺のビルが崩れ落ち、轟音と共に崩れて行った。

その地盤の崩れにMHD機が巻き込まれる。

隼は土煙の中に突っ込み、敵機のいるであろう場所に左腕を伸ばした。頭部を確実に掴む。続いて左足を軸にして右足で腹部を蹴り飛ばす。

たったそれだけで、敵機の装甲は砕け散った。

アラート
警報。

電磁エネルギー・ボムが目の前に投げ込まれてくるのが見えた。

隼はすばやく照準をあわせて、エネルギー・ボムを破壊する。爆破の衝撃で土煙が吹き飛び、機体が数メートル退いた。

背面アラート。

隼はとっさに後ろへ向かってレーザーを投げた。その動作の一環で機体を回転させ、しゃがみながら後ろを向く。

敵機のレーザーが機体のはるか上を過ぎていった。

瞬時に接近し、敵機の右腕を殴り飛ばし、胸部に蹴りを食らわず。少し丈夫に出来ているのか、威力が足りなかったのか、敵機はまだ生き残っていた。

唐突に右モニターからアラート。敵機の頭部を強引に掴み上げ、

右側に向ける。

レイザーが盾となった敵機に直撃した。

爆発する前にその場を脱し、隼は右側へいる敵機へと跳躍して向かう。

空中で照準を合わせられたのが、分かった。

だが。

最後の敵機は胸部をレイザーで貫かれて、爆破した。

G E S 機が撃ち貫いたのだ。

「一兎しか追えない者に生き残る術はないよ」

息切れ一つせず、隼は笑ったままG E S 機の眼前へ向かう。

ここでG E S 機が隼の機体を攻撃して来る可能性も否定できなかった。

しかし、G E S 機は動かず、黙って空を指差す。

空。

コックピット中央部に装着されたレバーを上へ上げると、モニターが上部へ傾いた。

静かな音と共に。

巨大な飛行艦が姿を現した。

『こちらはG E S 正規軍第七艦隊、艦長のシリンドゥウェイカーである。貴官の栄えある行いを称えよう。乗り込みたまえ』

あの日、見たままの世界は変わって行く。他でもない、自らの手によって。

たった少し石が投げ込まただけで、崩壊するほどにもろい世界だったのだ。

隼はコックピット内、一人で頷く。

自分の思った通りだった。

1 少年はたゆたう（後書き）

初めまして、向笠種時^{ムカサ・タネマキ}と申します。

素人ではありますが、何卒ご容赦を下さい。

一人でも多く、この小説で楽しみ下さる事こそ作者冥利に尽きる
というものです。

よろしく願います。

2 勝利の光景を目にするとき

G E S。

正式名称をGreat and Evolve the Sky scraper。天まで届きそうなほどに高い塔を中心にした、軍事施設である。若者の育成にも力を入れており、義務教育とは別の特殊な訓練を受けるために作られた施設でもある。学問・技術面に関しても最先端を行く広大な都市と言って過言ではない。

それゆえに、一般人のG E Sに関する認識は『優秀な人が行くところ』なのであった。

隼はG E Sの上空、電磁斥力の生み出す黒いエネルギーの空にいた。より詳細には、空に停艦している巨大飛行艦の中の、巨大人型兵器が複数格納されている倉庫にいた。

鋼色の角ばったフォルムが際立つM H D 巨大人型兵器の名前である から慎重に降りた隼は、自分が注目を浴びていることに気づく。

当然だった。

敵組織の機体の中から、ただの学生が降りてきたのだから。

「まずは感謝しよう、少年。私が艦長のシリンドゥウェイカーだ」

白髪混じりの男。体格は山のようなだった。組み合わせば骨の二、三本は砕けるだろう。同時に、隼は厳格そうな印象を受けた。顔に刻まれた無数の皺が、その印象に拍車をかける。

それにしても、シリンドゥウェイカー？

聞いたことの無い名前だった。これほどの大艦隊の艦長に就任するほどであれば実績がそれなりにあってもおかしくは無い。その意味するところは、つまり、この艦は秘匿されているのだ。

「初めまして、日雀隼です」

「学生かね？」

「ええ。今年の春から高校生になります」

喧騒。ひそひそという小さな話し声が耳まで届く。

シリンドの背後に整列する軍人が各々に驚きを示していた。

「EEの人間、ではないようだな。あの機体は？」

「はい。校舎裏に待機しているMHD-035……アレですね、を、いただきました」

「奪ったということか？」

「その通りです」

隙のない人間。隼はシリンドがかなりの実力者であることを悟った。艦長を任されるほどだ。実力があることは予想していたが。すると力カツと音がして、整列した軍人が中央に道を開ける。シリンドは後ろを振り返ることなく姿勢を正した。

ローファアの地面を擦る音だけが、その場に響き渡る。

軍服の女性であった。

若い。二十くらいだろうか。長く麗しい水色の髪をポニー・テールに束ねた女性である。やがて彼女は隼の目の前までやって来ると、微笑みながら右手を差し出した。

「初めまして。私はGES正規軍飛行艦隊総司令官のシェーラ・マクファレン。分かりやすく言うと、この艦で一番偉い人、よ」

「よろしくおねがいします。あなたが決定権を担っていると見込んで、早速ですが、自分の処分をお聞きしたい」

その場に緊張が奔った。

シェーラの清白な顔に苦いものが表れる。それはそうだ。得体の

知れない人間を招き入れて、さあ仲間になつて一緒に戦いましょう、などという夢物語は最初から期待していなかった。

だが問題なのはどの程度の処分で、どういった方向性なのか、である。シェーラは苦虫を噛み潰したような表情のまま、言った。

「ひとまずはこちらで身柄を預からせていただくわ。それから所定の手続きが終わり次第、あなたを解放する」

やはりそうなるだろうなと隼が頷きかけた時だった。

「司令、私から少々」

重たい言葉を放ったのは、シリンドである。後ろに手を組んだまま、彼は表情を一切変えず、シェーラの返答すら待たず、後の言葉を続けた。

「彼の成果は軍人である自分から見ても非常に優秀なものであったと思われます。彼を失うのは、惜しいかと」

「しかし本部の会議では『早急に関係性を絶つべき』と」

「これは彼を不審人物として捉えた上での結論であります。ひいては一度彼を解放したものとし、再度私の部隊に推薦、配備したい。機密面から考えても、手元に置いて置くのが最善でありましょう」

頭が堅い人物だと思っていたが、そうでもないらしい。隼は思わぬ運の良さに気分が躍るようだった。

むしろ本部に縛られているのは、このシェーラ「マクファーレン」という総司令官である。立場上は彼女の方が偉いのだから当然だが、しかし、シリンド「ウェイカー」の、上司に強引すぎるほどの提言

何らかの後ろ盾がなければ危険すぎはしないだろうか？

あるいは、何らかの強力な後ろ盾が、あるのかもしれない。

シェーラが苦い顔を和らげずに言う。

「シリンド少佐、公私を混同なさるおつもりですか？」

「とんでもない。公正な判断であります」

「どうやらあなたのおてんば娘は、彼を妙に気に入っているようですが」

「関係性は皆無です。単純に、彼の能力を評価したまででありましよう。私は例の実験機に彼の搭乗を推薦したいとも考えています」

再び緊張が奔った。流れは完全にシリンドが支配している。こうなれば隼が何もせずとも、事は思惑通り運ばれるだろう。

運が良かったのだ。

しばらく睨みあっていたシェーラとシリンドだったが、シェーラは一瞬だけなんとも言いがたいような表情になって、最初の笑顔に戻る。

「分かりました。この件はウェイカー少佐、貴官に一任します。

聞いていた通りよ。あなたには申し訳ないけど、運が悪かったと思つて頂戴」

「分かりました。そう思うことにします」

「付いて来い、少年」

隼は一礼して、シェーラの脇を通る。

「それとも計算通りかしら、学生くん」

ぼそりと呟いた彼女の言葉を、隼は聞こえなかったふりをして、シリンドに続いた。

A x i o n T r i g g e r アクショントリガー

2 勝利の光景を目にするとき

艦体の内部区画はそれほど入り組んでいなかった。むしろ規則的に通路が整備されているためか、非常に覚えやすい構造をしている。というのが、シリンドに付いて行く途中、隼が思ったことだった。もしかすると、電磁斥力エネルギーの技術は予想より遥かに進化しているのかもしれない。苦く思う隼だったが、致し方ないことだ。既にことは始まっている。今更引き返すことはできない。

「少年」

ぴたり、とシリンドが止まった。

その声にやや敵意を感じ、隼は身構える。自分は武器を持っていない。鞆もMHD機の内部である。対して相手は軍人。銃の一つや二つは携帯しているだろう。

不条理な展開だったが、これも致し方ないというのか。

「この目で見ることが出来て光栄だ。電磁斥力を進化せしめた神童」
「なるほど、気づいておられたのですか」

「堂々と名乗って置いて、今更だな。当時いた天才のうちでも君だけは別格だった」

「当時いた天才？」

年寄りの戯言だ、とシリンドは会話を中断させる。情報提供は期待できない。力関係をはつきりさせておきたいのだろう。

彼は非常に、非情に軍人だ。力の差を完璧に把握しているし、鎌をかける余地すらない。

「目的は何だね」

「特にありません。強いて言うならば好奇心です」

事実ではない。だが事実に近い。

どちらにしろ、相手にはわからない。話す理由もない。隼はシリンドの背中を睨み付けた。

不穏な動きがあれば、即座に対応する必要がある。彼は恐らく強い。武器を持っていないことを考慮しても、勝率は低いだろう。

極めつけに地の利は相手にある。

最も、隼は警戒はしていても緊張はしていなかった。ここで彼が敵に回することは考えられないことではないが、考えにくい。

「君が何を考えているかは分からない。だが彼女の命が危ぶまれた場合、私は君を即座に殺す。憶えて置きたまえ」

それきりシリンドは無言のまま、ドアを開けて道を開ける。

入れ、ということだろうか。

何かの試験、試練なのかもしれない。隼は警戒をそのままに、部屋へと足を踏み入れる。

「あ、シリンドさん？ まだ準備中で、もうちょっと待って……え？」

現れたのは、少女だった。

寝癖のついた髪の毛を櫛でとかしながら、呆けた表情をしている、ただの平凡な少女だ。特徴などない。威厳もなければ神秘性もない。何者なのだろう。

というか、寝巻きである。いわゆるパジャマだ。今の今まで眠っていたのだろうか。夕刻だというのに。不規則な生活をしているに違いない。

それにしても、見るからに頭の悪そうな容貌だった。目を丸くしているし、口は開きっぱなしである。少なくとも軍にいるべき、いるような人間ではない。

「紹介しよう。彼女は前空^{マエゾラ}春花^{ハルカ}准尉だ」

「初めまして、前空さん。日雀です。よろしくおねがいします」
「え？ え？ どうして？ あ、あれえ？」

隙のないシリンドとは大違いだ。堅い人間ばかり見ていたせいか、隼には彼女がひどく場違いな人間のように感じられた。

いや、彼女は実際に場違いだったのだ。

陰が無い。

理由がない。

彼女からはそれらが感じられなかった。裏が感じられなかった。本当に裏が無いのか、裏を隠すのがよほど上手い人間か。

見えるはずの『正解』が、彼女には存在しない。軍隊に在るべき人間ではない。隼は不審に感じた。直感だった。

得体の知れない人間である。あるいは、人間ではないか。

「あたし、いえ私、春花つていいいます！」
「え」

さっき紹介されただろ？

と言いかけて、隼は相手の雰囲気呑まれていることにようやく気づいた。

しかしそれは副次的なものだろう。彼女の本質とは思えない。シ lind やシェーラ以上に、何を考えているのか分からない人物だった。

「よろしくね、日雀くん！」

「はい、よろしくおねがいします」

「とりあえず上がって！　今お茶入れるから！」

「准尉、ひとまずは服装を」

「え？」

静かな空気が流れる。

春花は温度計のように、下から上まで肌色を真っ赤にして、口を大きく開けた。

「いやあああああああ！！」

理解に苦しむな　隼は呆れながらそう思った。

女の子の部屋という割には、洒落つ気のかけらもない部屋である。GES正規軍の正式な艦なのだからそれは当然なのだが……なんだか釈然としない。おそらくは彼女のまとう雰囲気が、この場に似つかわしくないからだ。

「お待たせしました」

寝巻き姿から一転して白い軍服に着替えた少女、前空春花。彼女は一体何者なのか。

自分のことを気にかけている、と言っていた気がする。何らかの特殊な人材？ それとも……。

「君のお陰で僕は助かったみたいで、ありがとうございます」

「え？ い、いえいえいえ、大丈夫だよ！ 日雀くんこそ、私のわがままでこんなことになっちゃって、ごめんね」

シリンドゥウェイカーからはこう言い残されている。

君の任務は当面の間、前空春花の護衛である。命を賭して彼女の護衛にあたれ。

つまりは彼女がいずれかから狙われる重要人物だということを示している。しかしそうは見えない。優秀な人物というのは、必ずしも陰があるものなのだ。

ところどころ癖のついた髪をなでつけながら、春花は言う。

「日雀くんは、学生、なんだよね」

「ええ。そうですが、今年の春からは高校生です」

「あ、それなら私と同じ年だ。よかったあー、ここの艦って私と年の近い人ってあんまりいないから……」

一緒にのクラスになれるといいね！ と春花は微笑んだ。

「何の話でしょうか」

「えっと……日雀くんはGESに入るんだよね？ こんな状況になっちゃったし」

そうなのだろうか？

確かに表面上の辻褄合わせとしては、GESに入って置いた方が都合が良い、ということは分かる。

否。

そもそも隼の任務は当面の間彼女の護衛である。四六時中、彼女の近くにいななければならない。彼女がGESに行くならば、隼も必然的にGESに行くべきなのだ。

シリンズの考えていることが分かって来た。隼という戦力を確保すると同時に、彼女の近くにいるという制限を付属したのだ。下手な行動は出来ない。

「どうも、そうみたいですな
「ぶっ」

隼の困ったような言い方がツボにはまったのか、春花はいきなり吹き出した。とっさに背を向けて肩を震わせる。

どこが面白かったのだろう。

ただ単に彼女が笑い上戸なだけかもしれない。

「変わってないなあ」

「は……なんだ？」

艦体が揺らいだ。轟音と共に伝わる振動。隼はとっさに躓きかけた春花の体を支える。

『警報レベルイエロー。敵襲です。メールの操縦者はすみやかに出撃準備。艦長は至急ブリッジへ』

敵襲。

EEというテロリストのことだろう。隼は舌打ちした。ペースが早い。MHD機を奪われたことがよほど堪えたのか。しかしこうにも連続的であると、GESが劣勢な理由にも得心がゆく。

「日雀くん」

突然、ぎゅうつと手を握られた。

その、あまりの真剣な声色に、隼は一瞬思考が止まってしまったような、そんな錯覚に陥った。敵襲、イエロー、メール、あらゆる単語が白紙になり、彼女の真摯な瞳に吸い込まれていく。

魔法と錯覚するほど、彼女の瞳は魅力的だった。神秘的だった。神々しかった。

ずっと見ていたい気にさせる。

そんな瞳。

綺麗だった。芸術品のようだった。美しい、赤い瞳。

これが同じ年の少女だというのか。

隼は彼女の瞳から目を逸らした。

ところが、そうそう立ち止まってもいられない。事態は一刻を争うといっているだろう。着弾した可能性もある。メールというのは何だろうか？ 単語が重なり、渦を作り、答えを導き出す。

正解が隼の脳内に直接働きかける。

真実が可視化される。

それは知識として、情報として、何らかの媒体を通して自らの本質に付属される。

そうして、理解する。

メールというのは、あの人型兵器の名称だ。着弾はしていない。出撃準備ということは、未だ交戦はしていないようだ。イエローとはそのレベル。その程度の余裕あるレベル。

「日雀くん、ごめんね。ごめんなさい」

春花が憂いを帯びた表情で言う。か細い声だった。隼はあくまで誠実に答えを返す。

「何を謝っているのかは分かりませんが、僕は感謝していますよ。」

あなた方に。それで、僕の乗るべき実験機というのは、どこにあるのでしょうか？」

「うん、付いて来て」

彼女が先導し、走る。

隼は状況を吟味するの忘れ、いつの間にか、彼女の謝罪の理由をひたすらに考えていた。

「大部隊ね。メールによる空中戦はまだ出来ないはずだろうけど」

「目的はGESでしょう。EE側のMHD-035でしたか。アレを奪われたから、焦っているのです」

「ということは、あの大部隊は囲ってこと？」

「一概にそうとも言いきれません。援護部隊という可能性も。ともあれこの数では……」

ブリッジではシ lind とシェーラが対談していた。目先の敵の数は飛行艦が三機。小型戦闘機が十六機いる。

いくらGESの拠点といえど、この数を持って来られては迎撃が難しい。

彼ら、EEの強みとはその奇襲性にあつた。特殊電磁場の生み出す黒い空の内側から唐突に現れる。索敵は出来ない。だからこそ、こちらは一方的に不利になるのだ。

準備の時間がないせいだ。

だが、今回はそれがある。どうしてか、敵はまだ攻撃して来ていない。

「こちらは地上にだけ気を配っていれば良いでしょう」

「シ lind 少佐？」

「何、彼がやってくれます」

メイルの空中戦は不可能である。
その技術がないからだ。あれには重力に逆らうほどの飛行性能を
積めない。

今のところは、だが。

「実験機だからって、そんな機能はないはずだけど」

「でしよな」

「でしよなって……少佐、あなたは」

「ともかく、地上にだけ気を配っていれば良い」

シェーラは苦い顔をしながらも、その言葉に従うしかなかった。

「メイルっていうのは、あの機械の システムそのものの名前なの。EE側のMHDもメイル。GESのプロト機もメイル。詳しいことは後でちゃんと説明するね」

「つまりEEとGESは敵対している。戦闘にはメイルが使用されるということでしょう。それだけで十分です。僕はエンジニアではありませんので」

前が見えないほど暗い通路を駆けて通り、二人は大きな広間に出た。

暗い。暗闇だ。

何も見えない。春花の手に引かれるがまま進んでいるだけだ。そう、いつも暗闇だった。未来は見えない。幸せな未来などない。見上げた先の空は、いつだって暗闇なのだ。

「日雀くん、これがあなたの機体です」

カッと、ライトが点灯する。

その眩しさに目がくらんで、隼は手でやや影を作る。次第に慣れて来た。白い機体。真っ白な機体が目に映る。

カラーリングはされていない。

ただ、真っ白な。

真っ白な機体。

鋭利なフォルムをしていた。人型にしては鋭すぎる。その鋭さが邪魔になるだろうと思うくらい、鋭利だった。

「エレベータからコックピットに行ける。これがマスターキー」

赤い鍵。

隼は受け取って、エレベータに乗った。機械の擦れる音がする。春花の目線が段々と上へ移っていった。

コックピットは思っていたよりも狭かった。構造自体はMHD-035のそれと大差なかったが、ハッチごとコックピットが傾く、なんてことはなさそうで、隼は少し安堵する。

OSが起動して、狭いコックピットのモニターが明滅した。

『神経接続共有開始 コンプリート。音声認識』

「日雀隼」

『パイロットをヒガラ・シュンと認識。言語は日本語のまま固定。システム・リミット解除。全機能動作確認 オールグリーン。コードネーム“クオーク”起動完了』

「通信をブリッジへ繋げ」

雑音はなかった。MHD機のそれよりも、スペックは上のようだ。性能差で勝っているという事実が、隼の緊張をほぐす。

「こちら日雀隼。敵機を確認したい」

『日雀くん！？ あなた、まさか……あの実験機に！？』

『敵機は滞空状態。飛行艦が三機。小型戦闘機が十六機だ。情報を送る』

「分かりました。飛行ユニットはありますか？」

『今のところない』

「では射出して下さい」

シェーラが息を呑むのが通信越しに聞こえた。

飛行機能が搭載されていない状態で、強引に飛行しようとする隼の気概に対して。

いや、それよりも。

危険であることを知りつつ、命を捨てるような行動に出る隼の覚悟に対してである。

『射出準備に移る。クオーク機は待機しておけ』

「ワイヤーフックを要請します」

『ワイヤーフック？』

「ええ、できれば丈夫なものを三つ」

『了解。甲板射出待機時に左武装ラックに装着させる』

「分かりました。通信終了」

モニターは六つあった。

正面、左右、背面、正面下部、正面上部。

すさまじいスペックである。

武装は電磁レイザーが二つ。エネルギー残量は100%となっているが、どのくらいの時間の稼動でどのくらい消費するのかが分からないのは致命的だった。

近接戦闘の武装も欲しいところではあったが、時間がない。隼は深呼吸する。

二度目の出撃であった。常に死と隣り合わせの現実。

だがこれでいい。

モニター下部に機体を見上げる春花の不安げな表情があった。

「俺は絶対に認めない」

自分に言い聞かせるように、呟く。

甲高い音がした。機体下部のエレベーターが高速で機体を運ぶ。強烈なGだったが、隼はなんとか耐えることが出来た。

もしかすると、Gを極力抑える機能も搭載されているのかもしれない。

ならば楽勝だ。

空が見えた。黒い空。そして敵の艦隊。行けるだろうか。

『ワイヤーフック装備完了。本作戦時より日雀、君のコードネームをホワイトとする。階級は特別少尉。こちらの命令には極力従ってもらおう』

「了解しました」

『では射出する。カウントスリー。ツー。ワン』

強烈な機械の擦れる音がした。本来射出機能はメール用に作っていないのだろう。当たり前である。

しかしこれしか方法はなかった。

クオーク機。

シリンドはそう言っていた。

この機体の名称はクオーク。

射出される。空中に投げ出された。どうしようもない浮遊感が身を包む。機体に乗っていても感覚が伝わってくるんだな、と隼は感動していた。

右手でワイヤーフックを引き放つ。

フックが敵の飛行艦に突き刺さった。

予想だにしなかった行動だったのか、敵の対応が遅い。隼はさきほど突き刺したワイヤーフックに掴まって移動しながら、続いて二つ目のワイヤーフックを二機目の艦体に放つ。

一つ目のワイヤーフックを引き寄せ、二機目の艦体まで跳躍した。つまりは振り子の要領だ。

振り子のように揺れながら、飛行艦を突き刺して進む。敵機のレイザーが機体の真横を通り過ぎた。引き寄せた一つ目のワイヤーフックを三機目の飛行艦に放つと同時に、二機目の艦体に着地する。

ものすごいパワーだった。

飛行艦が一瞬のうちにクオークの足場となり、クオークはそのまま再度跳躍する。ワイヤーを掴んだまま、その逆の手で電磁レイザーを掴み取った。

飛行艦に向けて三射、撃ち放つ。

さすがにこの距離では回避のしようがなかった。三機あつた艦体はレイザーに撃たれ、爆散する。十六機の戦闘機の何機かが爆破に巻き込まれていった。ワイヤーを投げ捨て、クオークは重力にしたがつて落下していく。

『日雀くん！ 大丈夫！？』

『こちらホワイト。問題ありません。地上の戦闘状況は？』

『地上の戦況は五分五分だ、ホワイト少尉。このまま戦闘に移ってくれ』

『日雀くん、無茶はしちゃだめだよ！ 分かった！？』

『こら、春花！ 彼のコードネームはホワイトだってさっき散々』

『了解です。通信終了』

行ける。

余裕だ。このクオーク機はMHD-035の性能をも遥かに上回

っている。負けることはありえない。

モニターが地上を映し出す。特に指摘がなかったということは、着地も可能なはずだ。

行ける。

これなら。

あの目見たままの、何一つ変わらない、閉じ込められた虚構の世界を。

この手で。

変えられる　　！

脚部からブースターが展開する。落下エネルギーをブースターが相殺し、ややラグがあつて、地上へと足を着ける。

敵機は五機。味方機は四機。

唐突に空から現れた機体にMHD機の陣形が崩れた。隼はその隙を見逃さず、電磁レイザーで撃ち抜く。爆破。

脚部ブースター展開。MHDを軽々と凌駕したスピードで、クオークはMHDの背後に回りこみ、腰部に回し蹴りを放った。ひしやげるMHD機。予備動作で電磁レイザーをもう一つ掴み取る。左右同時に照準をあわせ、引き金を引く。

爆破が起こった。

『なんだ、何が　あの変な動きの機体をしとめるおッ！』

『無茶だ、撤退命令はまだなのか！？　あんな、あんな化け物に敵うはずが』

『下がれ、俺がやる！』

『複数機で取り囲め！』

「通信傍受の機能も付いているのか……随分なオーバースペックだよ、本当に！」

クオークを取り囲む敵機。

「援軍か……通信、味方機に繋げ」

機体A.Iに命令すると同時、クオークは敵機の放つ電磁レーザーをしゃがんで回避した。

「こちらホワイト。敵機はこれで全てか？」

『あ、え、はい！ これで全てであります！』

「では黙ってみている」

しゃがんだまま、両手に掴んだ電磁レーザーで二機の頭部を吹き飛ばす。脚部ブースターをフル稼働させ、眼前の一機に飛び膝蹴りを打った。

その勢いが凄まじかった。MHD機のコックピットが粉々に砕け散る。飛び上がったまま電磁レーザーを上へ放り投げ、最後のワイヤーフックを掴み、放つ。突き刺さった機体を背負い投げの要領で敵機へ強引に激突させた。

爆破。

『おい、援軍は！？ RO！ RO！ 応答せよ、RO！』

クオークが降って来た電磁レーザーを跳躍と同時に掴み取った。

着地。脚部ブースター展開終了。

電磁レーザーの照準を敵機にあわせ、撃つ。

続いて頭部を破壊した二機に追撃を放つ。

炎と黒煙が飛び散り、舞った。機体性能が凌駕していた。スピードとパワーが段違いだった。隼はコックピットの中で、独りでに笑った。

笑っしかなかった。

「通信、ブリッジ」

電磁レーザーをラックに収納しながら、隼はつぶやく。

「敵機はすべて撃破した」

3 静寂のたたかい

電磁斥力エネルギーの発端について。

それを話すにはまず、かつての大災害を話さなければならない。

ソーリーストーム

十五年前に起こった太陽嵐は、地球の持つ本来の磁場を狂わせ、電磁場の空を作り出した。それが現在の黒い空　特殊電磁場の空である。電力により稼動していた電子機器の全てに異常をきたし、磁場の影響で死者すら出たという。真つ先に対応したのは、当時のアメリカ合衆国だった。合衆国は電磁場の空をどうにか消滅させられないかと考えていたが、しかし同時期、とある人物によってその考えは結果的に失われることとなる。

その『とある人物』は電磁場を利用しようと考えた。

電磁場最大の特色は、ぶつかりあうことで爆発的なエネルギーを生み出すこと。それを利用し、新たなエネルギーに対応した電子機器を作り出す、人類のエネルギー革命を起こそうと考えたのだ。

しかしながら事態は停滞を免れ得なかった。エネルギーが強力すぎるために、制御機関を開発するための技術力が存在しなかったのだ。

『とある人物』は悩み考えた挙句、エネルギー革命を諦め、電磁場の消滅に力を注ぐことにした。

ところが。

太陽嵐から五年。電磁場のエネルギー利用技術が突如として出現した。発信地は日本国である。歴史的な出来事といえるだろう。

それからはとんとん拍子にことが進んだ。『とある人物』は技術を応用し、革新させ、人類は太陽嵐の災害から解放された。

第一次新エネルギー革命。

電磁斥力エネルギーはこうして生まれたのだった。

表向きは。

「まさか、あんなものを完成させているとは…… G E S め、条約時に細工しおったか」

顔に無数の皺を刻まれた老人が憤怒の表情を浮かべる。衰えた肉体とは思えないほどにすさまじい活力に満ち溢れていた。底の知れぬその風貌に若干の恐れを抱いて、隣に佇む少年が柔和な微笑を浮かべる。

「いえ、あの程度なら技術的にこちらでも可能です。既に取り掛かっております」

「ふん、当然だ。 G E S と来たら、未だレイザーなどという時代遅れの部品を使っておる。大方、上層部が時代の流れに付いて行けていないのだろうよ」

「そうでしょうね。むしろ問題なのは、自分の推測でしかありませんが、あのパイロットかと」

老人の表情から憤怒が消えた。

目をきらきらと輝かせ、口元を綻ばせる様は、さながら子供のようである。しかし、その姿には言い知れぬ不快感を伴っていた。憤怒の表情ではない。けれど子供のそれでもない。読み取れないほどに深い闇を携えていたのだ。

「パイロット。そう言ったか」

「ええ。常軌を逸している、と言ってよいでしょう。現在調査中です」

老人はその手に持った杖で床をカツと叩く。少年は笑みを濃くした。彼が杖でものを叩くときは、非常に機嫌が良いときである。

「オッド、 N E O デバイサーの完成はまだかね？」

「既に完成しておりますが、動作テストはまだです。何、成功しますよ」

「待ち遠しいな。パイロットが問題か。一体どのような怪物なのやら」

オッドは一礼してその場を去った。問題はない。ことは全て上々である。

「どうかされましたか、クラフティ中佐」

補佐官の社交辞令に笑みを返し、オッドは嘆息した。

「いや、何。老いはどれほど優秀な人間ですら、愚かにしてしまうのだなと思っていたところだ」

銀色の髪が、風に揺れた。

A x i o n T r i g g e r アクショントリガー

3 静寂のたたかい

E l e c t r o m a g n e t i c E n e r g y 。 電磁場の内側

から出現する、正体不明の敵対組織の名称である。その目的、組織構成は一切が不明であり、MHDと呼ばれるメイルを使用している。技術力自体はそれほど変わらないものの、電磁場の内側を自由に移動できる彼らと違ってGES側は電磁場の内側にまで侵入するほどの技術力を持たない。その点では、EE側の方が遥かに技術が進んでいると言えるだろう。

隼はコーヒを一気に飲み干して、ゴミ箱に放り投げた。

GESはその迎撃の為にある。そう考えれば、GESの情報が流出していないことも容易に納得できた。度重なる報道規制も、理由あつてのことなのだろう。しかし迎撃ということは、後手後手に回らなければならない。それだけでも不利なのに、技術的に差がないというのは、難しい問題である。

『まもなく着艦します。各員甲板に集合して下さい。繰り返します。まもなく着艦。各員甲板に集合して下さい』

幸いなのは、どうやら休む暇が与えられることだった。

隼はそそくさと甲板に向かった。

「日雀少尉、GESへの編入手続きが完了しました。軍港に降りましたらGESの士官に指示を受けてください。尚、GES降下後は前空春花の護衛任務を一時的に解除することです」
「了解」

オペレーターの女性からの報告に敬礼で答える。春花はどこだろうか。姿を見せない彼女を不審に思いつつも、隼は軍港に渡り移る。GES内部の軍港には、既にいくつかの飛行艦が着艦済みだった。第七艦隊と言っていたか。少なくともこれだけの規模の飛行艦が七つあるということだろう。

技術とは恐ろしいものだ。与えるだけでとめどなく進んでしまう。それがたとえ、進む方向を間違えていたとしても。

ここに来て、隼は卒業するはずだった中学校を思い出した。もはやあの場所に戻ることはできない。進んでしまった。選んでしまった。その代償のようなものだ。後悔はないが、郷愁がないわけではない。失うということは、全てに共通して寂寥の感を得る。

だが、これは隼が望んでいたことだ。

自分の評価を上げるために善人を気取っていた教師。注目を浴びたいがために人を利用する住吉斎。その他クラスメイト。今となつては懐かしむばかりで、彼らの性格すら思い出せない。

思い出は美化されるとは言うが、確かにその通りだ。

彼らにも『良いところ』はあったのだろう。『良い人』と言えるかもしれない。しかし、所詮は表面上での話だ。本質的ではないし、本質的ではないからこそ意味がない。集団的圧力に吞まれているだけの、弱者である。

「あなたが例の天才パイロット？」

思考に没頭していたせいか、いつの間にか目の前に女の子がいることに話しかけられるまで気がつかなかった。水色の髪の毛を頭の両サイドで縛っている。ツインテールだ。どこかで見たような顔だが、隼は思い出せなかった。

「初めまして、日雀隼です。天才とは光栄ですが、自分は単なる新人パイロットであります」

「ふうん……あのクオークを使いこなして、敵軍を全滅させたって聞いたけど」

人の口に戸は立てられない、か。隼は心中苦笑した。

「シリンドゥウェイカー少佐のサポートのお陰です」

「ま、どうでもいいですけどね。GESのパイロットである以上は、成果を上げてもらっただけだし。わたし、ティーナ・マクファーレンよ。よろしく」

「よろしくお願いします」

ああ、総司令官に似ているのだ。シェーラ司令の姓も、マクファーレンであったような記憶がある。義理の姉妹ということもないだろうし、総司令官があのかみで一児の母ということもありえないから、血の繋がった妹なのだろう。

あえて気づいていない振りをして、隼は握手を交わした。

「わたしがあなたの案内役だからね。わたしの命令には従うこと。いいかしら？」

「了解です」

これではまるで芝居である。いや、まさに芝居だった。隼は道化を演じ、無能な振りをする。人は相手が自分より劣っていると思うと、途端に安心を感じるものだ。

我ながら下らないな、と隼はひそかにため息を付いた。ティーナの後に続いてGESの軍港を出ると、そこは広間である。とてもない大きさであった。GESの生徒と思われる者が行き交い、談笑している。公園のようなものなのかもしれない。あるいは食堂か。

「ここがロビーよ。どこへ行くにしてもここは通るから、そのうち見慣れるでしょ。中央に案内板があるから、分からなかったらそこを見ること」

「そつえば、自分はどこで生活をすればよいのでしょうか？ 何も聞いていないのですが」

「あなたはウェイカー少佐の部隊でしょ？　なら、第七艦隊じゃないのかしら、よく知らないけれど」

第七艦隊。あの飛行艦の中で生活するのは少しならず気が引ける。それでは軟禁とあまり変わりが無い。

せめてGESの寮で生活が出来れば、言うことはないのだが
そう思つて、隼は自分が注目を浴びていることによろやく気がついた。

まさかこうまで噂が広まっているはずはないと予想していたから、驚かざるを得ない。みな一様に隼を盗み見ている。額に手やつて、面倒事を嘆いた。注目を浴びるのは非常に面倒だ。逐一行動に監視が付くのとそう変わらない。

「で、ここから向こうが資料室で、訓練棟へ移動するならあつちのエレベーターを使うといいわ。分かったかしら、天才パイロット君？」

「はい、分かりました」

やけに嫌味な言い方である。それも仕方のないことなのかもしれない。彼女はプライドが高いのだ。劣等感を抱いているのだろう。唐突に現れた素人に立場を食われたことに。と来れば、彼女の実力も相当なものと考えていい。プライドとは根拠に伴う。根拠のないプライドに劣等感は伴わない。つまり彼女のプライドは相応の実力に基づくものなのだ。

あたりを見回して歩いていたせいで、ティーナが立ち止まったことに気づくのがやや遅れた。隼は振り返ってティーナに微笑みかける。

「どうしました？」

彼女の視線が、体の向こう側に焦点を結ぶ。

さきほどとは打って変わった、非情の面持ち。

そして、鋭い声を放つ。

「スコアトップの人が、わたしに何のご用件かしら」

「僕の用件は君じゃない。彼だよ、マクファーレンさん」

隼は背後から敵意を感じて、ゆっくりと振り向いた。金髪の青年である。爽やかな笑みを浮かべてはいるが、隼には胡散臭いように見えた。同類だ。直感がそう告げる。これは演じている格好なのだ。彼は自分を演じている。これは彼の本質ではない。そういう人間性の一部に身を潜めた同類なのだ。

シ lindo「ウェイカーは当時いた天才のうち、と言っていた。つまりは自分のような正解の見える人間が他にも複数人いる、そういうことだろう。そのうちの一人がG E S にいたとしても不思議ではない。それが彼なのだろうか。

金色の瞳が隼を試すように見る。顔は笑っているが、目が笑っていない。どうして敵意を向けられるのかは分からなかったが、彼は只者ではなかった。脂汗をかいているような気分になって落ち着かず、隼は眼鏡をついと上げる。

「クオーク機のパイロットか」

頷く。

「少し手合わせ願いたい、いいかな」

「それほど暇じゃないんだ。悪いけど」

にらみ合う。よほど自信があるようだった。手合わせを求める理由が何なのかは分からないが、確かな敵意を感じる。どちらが強い

かをはつきりさせる？ 味方同士で？ 愚かだ。そんなことをしても得るものがない。もし得られるとすれば、ちつばけな矜持を保つべくして補充すべき、ほんのちよつとの優越感くらいなものだろう。ならば彼は必ずしも正解へ辿り着ける人間ではないのか？ それとも分かった上で演じているのか？ なんにせよ、注意すべき人物であることは確かだった。裏が見えない。底が見えない。だが確実に何かある。そういう人間だった。そういう人間だということが分かった。直感的に。ふと、そう気づかされるのだ。

「図に乗っていると足元を掬われるぞ」

彼の言葉に、隼は何気なく返す。

「注意力散漫なんじゃないか？ 図に乗っているだけで足元を掬われるなんて」

「減らず口を」

「お互い様だよ」

お互い様ではあった。互いに相手の能力を測りかねているところがあったし、互いに互いを嫌悪していた。本能的なものである。さきほど気づかされる、という表現を使つた隼だが、まさにその通りだった。

気づかされる。何らかの外的要因によつて、隼は彼の放つ何かに触発される。影響させられる。まるで重力が発生しているかのように、そこに偽物の自分が吸い込まれ、本質が表面化するのだ。

恐らくは、彼も同じはずだった。でなければ隼は彼と比較して、どうしても劣っているということになる。いや、ありえないことではない。しかし認めたくはないことだ。人間、誰しも他人と比較して劣っているなどとは考えたくもないだろう。

「少し、格の違いを思い知らせる必要があるようだね」

格。

相手からしてみれば、隼と彼の間に明確な差があるということなのだろうか。

「自分の力を過信して、多大な損害を与えてもらっては困る」

嫌な空気だった。いつの間にかG.E.S.のロビーに人が集まってきた。スコアトップというぐらいだから知名度は高いのだろう、ひしひしと周囲からの注目を浴びている。

いわく、スコアトップと向かい合っている、あの男は誰だ。

そうして生徒たちは『あの男』というレッテルを隼に貼り付けることだろう。スコアトップの人間と向かい合っていた『あの男』。非常に面倒な状況である。隼は諦めかけて、神様にでも願掛けをしようかと阿呆らしく考えた。

「あのね、さつきから二人の世界に入ってますけど！」

唐突に第三者が介入して来た。ティーナ「マクファアレンである。初対面の中から彼女の傲岸不遜振りには呆れていたが、こういった状況であるが故に、大助かりだった。」

「今は、わたしが彼を案内しているんですからね。はい、どいたどいた。邪魔よ、邪魔」

「マクファアレンさん、君とは」

「ええ、案内の続きをよろしくおねがいします、ティーナさん」

親しみをこめてそう呼ぶと、ティーナはやや照れ臭そうに口元をもごもごとさせて、隼の手首を強引に引っ張って行く。

一つ面倒が消えたことに安堵して、隼はほうつと溜息を付いた。

「アルフレッド」ロスチャイルド。GESのエースよ。残念ながらね」

缶コーヒーをひよいと投げ渡されながら、隼はさきほどのスコアトップの男について尋ねた。

GESの規模は大きく、敷地は広大である。まだ案内されていない場所が多くあるが、歩いてばかりもいられない。そこでティーナが休憩を提案したのだった。

しかし、どうしてか場所は人気のない屋外である。二人はそのひとかどのテーブルチェアに座り込んでいた。

「GESには他に実力を持った方がいらっしやらないのですか？」
「いることにはいるわ。けど、メールが導入されてまだ間もないしね。訓練を十分に受けた生徒の中でも、彼はダントツ。とてもじゃないけど、個人の総合スコアじゃ今更追いつけないのよ」

自信に満ち溢れた彼の態度を思い出す。プライドとは根柢に伴う。確かに彼はその実力に裏づけされたものを持っていたのだ。

だが重要なのはむしろその前の言葉だろう。

メールが導入されて間もない。それならばGESが劣勢なのも頷ける。恐らくEE側は既に訓練を施された人間ばかりで構成されており、こちらは不完全な訓練生が実戦に投入されているのだろう。マシンスペックの差、というよりは、操縦者のスペックの違いが大きく出ているのだ。

それならばスコアトップのアルフレッド「ロスチャイルド」を実戦に投入しなかったのはなぜか？

これも推測の域を出ないが、クオークと名の付く実験機は彼の専用機になる予定だったのではないだろうか。それゆえの敵意。量産機では彼の実力を発揮し切れないはずだ。

段々と見えて来る。GESという組織の構成が。

「それで、あなたは何なの？」

「何って言われても……僕は僕ですよ」

「あなたみたいな人が目的もなくここまで来る訳ないでしょうが。ねえ、電磁斥力エネルギーの開発者さん？」

彼女は含み笑いしながら横目で隼をとらえた。そういえばと、隼はシリンドロウエイカーの言葉を思い出す。堂々と名前を名乗って置きながら、どうにも自分の思い通りに行かず、ややむしゃくしやとしながら隼は『真人間』の仮面を取り外した。

「あー、やめたやめた」

「え？」

途端。

彼女はやはり照れ臭そうに自分の顔を手で仰いでいた。理解できずに呆けている隼を、しかめっ面で睨み付ける。自分が一人でシリ阿斯をしていたことと、彼女の憂いを吹き飛ばすような気楽さの対比があまりにもシニールで、隼はつい苦笑をもらした。

「何、笑ってんの」

「いや。そうだな、堂々と名乗って置いて今更だ」

当時の自分は確かな有名人だった。一部では。そもそも電磁斥力エネルギーの発案者は自分かもしれないが、その発案を形作った者は他にいるのだ。

そのほんの一部でしかない自分の名前がこうも広まっていることに驚きを隠せずにいたが、考えてみればここはGESである。電磁斥力エネルギーの情報くらいは流れているだろう。

「ここだと有名なのか」

「スコア上位はみんな知ってるわよ。あの子が得意げに話すから」
「ああ、なるほどね。あの子か」

前空春花。彼女はどうかやら自分のことを相当知っているらしい。どうしてだろうか。普段ならば唯一の正解がうつすらと浮かび上がるのに、彼女のことに関すると、何もかもが消えてしまう。

思考停止に等しかった。

何かのフィルターがかかっているように、正解に辿り着くことができない。厳重なロックがかかっているのではない。考えていることが、言葉にならないのだ。ゆえに結論も出ない。自分は今までに彼女と会った事がない。それは間違いないはずだ。

「やけにあなたのこと気に入ってるのね、あの子」

「みたいだ。理由が分からない」

「会った事無いの？」

「ない。今日が初対面だ」

興味深そうにため息を付くティーナ。隼の記憶が正しければ、彼女と出会ったのは今日が最初のはずだった。

「へー。でも恐ろしく猫被ってたのね、あなた」

「ずっとああしているつもりだったよ」

自分のことを知っている人が極少数ならば、そうしているつもりだった。そうすることで自分の注目度が下がるし、一般人のレッテ

ルを勝手に張ってくれるだろうから。

ところがそうではない。知っている人は幾人かいるようだし、何よりさきほどロビーでかなりの注目を集めてしまった。ここから真人間の振りをして、あまり効果は期待できない。

本当にこの世界は計算違いを次々と生み出し続ける。

「別に目的なんてないさ」

「そうなの？」

「うん。成り行きでここまで来てしまったようなものだ」

少し強引な言い訳だったが、ティーナはあえてそこに踏み込まなかった。本当のことを言えば、踏み込めなかったのだろう。隼はそう推測する。他人に干渉するには、相応の覚悟が必要なのだ。

責任力もなく、他人に干渉することのなんと愚かしいことだろうか。そんなことだから学び舎の教員はいつまで経っても保身に回るしかない。そんなことだから何かに縋らねば生きていけないのだ。

『そんなこと』すら分からない人間が、あまりにも多すぎる。

「ところで、ここは？」

「中庭よ。ううん、そろそろ案内の続きをしましょうか、シュン」

姉とは全く似ていないな　その言葉を、隼は心中で呟いた。

『現在時刻、21時。現在時刻、21時。一般生徒はすみやかに寮内へ戻りなさい。指導員、事務員は職員室へ集まること。以上』

放送が鳴り響いたのは、ティーナの案内が一段落ついた頃だった。訓練棟のメール・シミュレータで黙々と訓練が続いている生徒たちを眺めながら、隼はそこにいるはずのティーナを探す。

参ったな。指導員にまで目を付けられるのはご免こうむりたい。

これも一般生徒の挑発に易々と乗るティーナが原因だ。シミュレーションにおける勝敗などどちらでも構わないと言うものを。彼女は確かにあのシェーラ・マクファアーレンの妹と言えるかも知れない。落ち着きのないところが瓜二つである。

「おい、ティーナ！ ティーナ・マクファアーレン！」

「また勝負しているのか、彼女は」

隼はそれが自分に向けられた声であるとともに気がついた。隣から聞こえた為、すぐに気がつくのは当然なのだが、それを言った人物がアルフレッド・ロスチャイルドだというのだから始末に終えない。

よもや夢ではあるまいなと思って、隼は頬をつねるだのと馬鹿げたことを考えた。彼は自分と敵対していたはずではなかったか。あるいは余興なのか。どちらにしる信用のできない人間である。

「やあ、日雀君。スコア上位者には夜間の訓練が認められている。君もどうだ、僕と一戦？」

「生憎だが俺はスコア上位者じゃない」

「そして一般生徒でもない」

相変わらずの口の減らなさに、隼は嘆いた。シリンド・ウェイカ―がどれだけ都合の良い人物であったかがよく分かる。前空春花の方が幾分マシだ。彼女は自分にとって不快になる行動はしないのだから。

「夜と言っても、どうせ擬似天体は常に光り続けているのにね。昼間と変わらないよ。いつまで人は慣わしに引きずられているのかな」

「お前がどう思おうと勝手だけど、ロスチャイルド、独り言なら余所でやれ」

「いちいち言い方が頭に来るな、君のセリフは」

「お互い様だよ」

ぜひ一戦交える時を楽しみにしていると言い残して、アルフレッドは訓練を続ける一般生徒の衆へと紛れ込んで行った。

どうしてそこまで拘るのだろうか。プライドか。それとも別のものか。勝つか負けるか、強いかわい弱いか、二つのどちらかに分類されなければ気がすまないというのが

結局は彼も人間でしかないということだ。

それにしても、と隼は思う。今日一日の出来事だけで自伝が書けそうな勢いである。明確な目的のために他人がひどく邪魔なもののように思えて、隼は嘆息した。頭を抱えたい気分だった。己の要求が如何にせよ、結局、他人というものは関わって来るのだ。

人は他人なくして生きられない。それは果たして自由といえるのか。他人とのかかわりを強制されているようなものではないのか。

それをわかってない。分かってない人間が権力を握るのだ。

だからいつまで経っても、何一つ変わりはない。

向かう先が、定まっていらないから。

「一般生徒はすみやかに寮へ戻れという放送が聞こえなかったか！

三十秒以内に戻れ！ でなければ反省文だ！」

突如背後から怒声が響く。今度は誰だと振り向いた先に、シリンドゥエイカーと悲壮感溢れる前空春花の姿があった。

隼と彼女の視線が交差する。

彼女の疲れ果てた表情が、一変して花の咲いたような、美しい笑顔となった。シリンドの巨体の裏から頭だけ覗かせて手を振っているが、まさかそれが自分に向けられているものであるとは、あまり

考えたくない。

4 蒼茫の閃光

夢は麻薬のようなものだ。

いつまでも見ていたい気分にさせてくれる。ただただ生きる事の苦痛を取り除いた、幸福のみが存在する自分だけの空間。ずっと眠っていられるなら、その方が良い。しかしそうは行かない。いつかは目覚めが来る。

日雀隼が目を覚ましたとき、ついさきほどまで確かに見ていたはずの夢はその一端すら遺さずに消えてしまっていた。

ぼやける頭で、精一杯の覚醒を促す。

暗い部屋にいた。鋼鉄の壁を見て、自分がまるで監禁されているような錯覚を覚える。次第に目が冴えてくると、隼の頭に昨日の出来事が流れ込んで来た。

枕元に置かれた眼鏡をかけて、隼は起き上がる。

睡眠は重要だ。休息の時間が少なければ少ないほどエネルギー効率が悪くなる。急ぐ必要はない。もう人類が変化する為のレールの上に乗っているのだ。何もせずとも変わって行くだろう。自分はその修正をするだけでよい。

隼が起きるタイミングを見計らったように、右手首に着けた通信端末から声が鳴る。

『日雀少尉、本日六時〇〇分にG E S訓練棟制御室までお越し下さい』

「了解しましたよ」

自分にはすべきことがある。

いかなる苦痛を伴おうとも、いかに犠牲を払おうとも。したいことがある。

夢になど構っている余裕はないのだ。

A x i o n T r i g g e r アクショントリガー

4 蒼茫の閃光

「あ、少尉。おはようございます」
「おはようございます」

制御室には第七艦隊の面々がそろっていた。相も変わらず苦い表情を浮かべるシェーラ「マクファールレンが口を開く。」

「朝早くからごめんなさい。よく眠れた？」
「おかげさまで。ご用件とは？」
「ああ、あなたを実験機“クオーク”の正式なパイロットに任命したいと思うの。その件に関して、あなたの意見をとってね」

隼はしばらく考える振りをすることにした。非常にわざとらしいが、どちらにしろ相手にはわざとかさうでないかなどわかりはしないのだ。

あの機体はスペック的にも敵機を遙かに上回っていた。戦闘における実績を上げることでGES内での自分の立場を強くすることも可能だろう。

理由は様々だが、隼はその要求を快諾した。

「ありがとう。では、正式にあなたを少尉として第七艦隊シリンド
「ウェイカー直属のパイロットに任命します。これはその書類。明
後日までに必要事項を記入の後、事務官のミラルダ准尉に提出のこ
と」

「了解」

「よろしくおねがいしますね、日雀少尉」

「こちらこそ、ミラルダ准尉」

ああ、あのオペレータの　と隼は妙に納得して、頷いた。
第七艦隊のブリッジメンバーと挨拶をかわしてから、シエーラに
視線を戻す。よもやこれで終しまいという訳でもないだろう。

「それだけで、あなたの戦闘データを取らせてもらったわ。まず
はこれを、」

「遅れましたー！」

どたんどアを開け放って入って来たのは、日雀隼の護衛任務の
対象である前空春花准尉である。白い軍服は急ぎ着てきたのか、や
や乱れていた。

バカにならないほどに髪の毛がはねている。寝癖だろう。こちら
も変わらず、不規則な少女だった。

「すみません」

「……話を続けるわね。戦闘データから考察すると、あなたは単機
での行動が最適でしょう。今までのメール戦では見られなかった近
接格闘戦もこなしているわ。そのデータを踏まえて、何か要望はあ
りますか？」

「今のところは特にありません。ああ、緊急時のマニュアルや普段

の任務行動に関する指示があれば下さい」

「分かったわ。マニュアルは書類にまとめてあなたの部屋に置いておきます。他にはない？」

シェーラは制御室にいるメンバー全員に目配せして確認を取り、シリンドが頷いたのを見てから、声を張り上げた。

「それでは、第七艦隊の会合を終了します。各自所定の任務に戻りなさい」

ざつと音がして、一斉に敬礼をする。隼もそれにならった。

日雀隼に与えられた任務とは、前空春花の護衛任務である。

シェーラ＝マクファレーンの扱いといい、周りの状況といい、彼女が重要人物のようにはとも見えないが、ほかならぬシリンドの命令だ。聞かざるを得ないし、自分に選択権はないのだろう。

そういつわけで。

隼は春花とGESの訓練棟にいた。

「ふああ……ううん、眠いなあ。日雀くんは大丈夫なの？」

「僕は大丈夫です。それより、どうしてここなんですか？ GESの事情には通じてなくて」

早朝だからか、人影はなかった。いくつかのカプセルポット型戦闘用シミュレータが置いてあるだけの広い訓練棟に、春花と隼は二人だけである。

笑顔の絶えない少女は、ここでも優しく微笑んでいる。どれほど場違いな空間であろうと、恐らく彼女は笑っているのだろう、今の

ように。直感でも正解でもない、何と無く、何とは無しに、隼はそう思った。

「えっへへえ。あたしと一戦しない？」

「シミュレータですか。構いませんけど、授業などはないんですか？ クラス分けなどは？」

「なんか他の学校と違うみたいで、あたしたちは自由行動だって。だから大丈夫！ さ、はやくはやく！」

できれば実戦用の装備やセオリーを確認して置きたかった隼だが、護衛対象がそういうのでは仕方ないとシミュレータのカプセルポットに乗り込んだ。

どうみても戦闘訓練を受けた体ではない。

手加減をすべきか、どうか。

カプセルポットの電源が入ると、真っ暗だった空間に明かりが灯った。画面に敵機が映し出され、手元に操縦桿が配置される。隼は真横の折りたたみ式の座席を開いて、そこに座った。実戦を想定して構成された仮想フィールドにオンライン接続されているのだろうか。

『あー、あー。日雀くん、始めるよ？』

「了解」

画面上にカウン트가表示され、それがSTARTに切り替わった。問答無用で倒してしまおう。隼は操縦桿を握り締める。相手はあの少女だ。どちらにしろ彼女は悪あがきくらいしか出来ないだろう。画面上に照準が表示される。その中央に敵機をロックして、引き金を引き放った。

仮想データで構成された電磁レーザーが命中する。
終わった、と思った瞬間。

(アラート!?)

敵機の電磁レーザーをかるうじて回避して、隼は自分の機体の遅さに辟易しながら状況を見た。

左腕に黒い磁場が発生している。まるで盾だ。まさかシールド機能で搭載されているとは思ってもよらなかった。

『えっへっへえ。シールドが出せるってこと、知らなかったでしょ?』

「一度しか通じませんよ、それ」

なるほど、確かに不意を打たれた形にはなった。

しかし圧倒的な実力差は埋まらない。隼は再度電磁レーザーの照準を敵機に定めた。

「やっぱり勝てなかったかあ」

困り顔なのか笑い顔なのか、どっちつかずの表情をしながら春花がカプセルポットから降りる。結果は隼の圧勝だった。

最も、彼女の反射神経はかなりのものであったが。いくら正解の見えない相手とはいえ、レーザーを三度も防がれたのは 隼としては 大きな誤算である。

「攻撃を当てることを考えていちやだめですよ。相手の動きを考えて、それに照準をあわせるんです」

「難しいよ、日雀くんの言ってること」

「先読みってことです。あとは動きを強引に三次元的にするとか、色々工夫を」

「朝早いわね、お二人さん」

ティーナ「マクファアレン。」

昨日と変わらない自信に満ち溢れた態度で、彼女は訓練棟にやって来た。水色の髪は今日も頭の横で歩くたびに揺られる。

ぱあっと春花の表情が輝くのが、振り向かなくても伝わって来た。超能力者に目覚めたかなと冗談じみたことを考えて、隼は溜息を付く。

「ティーナちゃん！」

「どう、シュン。わたしと一戦？」

「悪いけど断るよ。俺は任務中なんだ。全く、君たちスコア上位者ってというのは、戦わないと気がすまないのか？」

アルフレッド「ロスチャイルドも同じようにシミュレーション上の戦いを望んでいた。

血気盛んであることは悪ではないが、血気盛んでしかないことは明確な悪だ。必要と不必要を混同するのは実に愚かな行為と言える。ということを一説明することすら面倒になって、隼から話題を転換した。

「ひとまず状況が知りたい。GESとEEの戦争について、色々聞きたいことがあるんだ。そもそもメイルはどうして生まれたか、とかね」

「質問の多いことねえ」

「まあまあ。日雀くんも色々知りたいことがあるだろうし、食堂行こ、食堂」

落ち着いて話せる機会がなかったものだから、隼はちょうどよかった。

これからの指針について、少し考える時間が欲しかったのだ。かと言ってシェーラやシリンドが素直に応じてくれるはずもない。都合の良い人材が手に入ったことに、とりあえず隼は満足することにして、三人は食堂へと足を進めた。

「分かっていない？」

その言葉に、驚きは含まれていなかった。確認の意味をこめた反芻である。それを理解しているのか、ティーナも余計な詮索はしなかった。

「ええ、メールはいつの間にか生まれていて、わたしたちは何も聞かされていないわ」

「どういうシステムで動いているのかも解説されていないのか」

隼はちらりと春花を盗み見た。彼女はいつも通りの様子である。両手で丁寧を持った紙コップを、ちよびちよびと飲み続けていた。これはもしかすると、ティーナやアルフレッドのようなスコア上位者より、彼女の方が詳しく知っているのではないだろうか。ところが、その予想は杞憂に終わる。

「システム自体は分かってるんだけどね。誰が作ったのかも分からない兵器を流用しているのよ、わたしたちは」

ただひたすら、EEの一方的な打撃を迎え撃つだけ。毎度ながらに悪戦苦闘を強いられつつけるGES。その構図で、最も得をする者は誰か。

単純に考えれば、EE側に有利な戦闘であるがゆえにEEは悪で

あると断言してしまうことが出来る。だが、そうではない奇妙な何かがあるのだ。前空春花の存在。GESの秘匿性。メールに関する一切の報道規制。

国民主権という安全な傘の内側で、一体どのような陰謀が張り巡らされているのか。推測でしかものを考えることが出来ない。

現代の社会体系を破壊するには、まずその本質を捉えなければならぬ。しかしこれも事実ばかりが隠されると、捉えようもないのだ。

だからこそ、自分のような人間がいるのだと隼は思った。差し当たってすべきことは、まるでGESの味方であるような振りをしながら情報を集めること。これしかない。

「そういえば、どうしてハルカには敬語なの？」

「言われてみればそうだよ。どうしてあたしには敬語なの？」

「前空さんは護衛対象だ。ウェイカー少佐直属の上官だぞ。任務行動である以上は敬語を使う」

伝わってないな、これは。

隼の目の前にいる二人は、どうやら言っていることの半分も理解できていないらしい。軍人というより学生である。年が若いのだから仕方ないと言えば仕方ないのだが。

「君はなぜ前空さんと仲が良いんだ？」

「スコアフィフスはハルカのありがたーい講義を何度も聴いているわ。年も近いし、当然でしょ？」

ティーナの言葉に賛同して、しきりに頷く春花。

スコアフィフス。恐らくスコア上位五名のことを指しているのだろう。彼女の言い草や軍事的地位からいって、春花はひょっとしたらメールについてかなり詳しいのかもしれない。第七艦隊のときも、

実験機の場所を正確に把握していたし、何より鍵を持っていた。

只の平凡な少女に、あんな強力な実験機のマスターキーを預ける道理がない。メールの基礎は知っていたようだし、本当に何者なのだろうか？

「あたしのありがたい講義を聞いてもらってます。えっへへえ」

「あ、ずっと聞きたかったんだけど、なんでハルカって」

『警報レベルレッド！ 敵襲である！ 一般生徒は避難せよ！ パイロットはただちに各部隊へ集合！ 繰り返す、敵襲である！』

隼はとつさに春花の腕を取って引き寄せた。体ごと強引に持ち上げられた春花は隼に飛び込む形となって、やや頬を染める。

「ティーナ、君は避難しておけ！」

「ちょ、ちよっと！ どこ行くの！？」

返答もせず、隼は春花の手を引っ張って駆け出した。前回襲撃時の警報レベルはイエロー。今回はレッド。つまり、非常に危険な状態ということだ。

悠長に食堂で情報収集などしている場合ではなかった。ティーナ「マクファアレンに聞くべき最初の質問はこうだ。『EEはどの程度の頻度で襲撃して来るのか？』。第七艦隊で隼はペースが早いと思ったが、それはあくまで正しかった。

「日雀くん！ 第三格納庫！」

「第七艦隊ではないのですか？」

「うん！ 微調整とデータ収集の為に第三格納庫に収納してあるの！ 場所は分かる？」

「分かります。前空さんはどうされますか？ 艦へ？」

しばし悩んだ春花だったが、時間が切迫していることも相まって、すぐに答えた。

「あたし……私は避難勧告のあと、第七艦隊へ急ぎます。一時的に私の護衛任務は解除です。ホワイト少尉はクオーク機に搭乗後、独自の判断でEEの迎撃に当たってください」

「了解。お気をつけて」

ちょうどいい。

彼女に命令する権限があるのなら、ちょうどよかった。まだクオーク機に乗って間もない。スペックの限界確認や戦闘能力分析の為に、ここでの戦闘は有意義なものになるはずだ。

隼は第三格納庫へ急いだ。

「彼は来るかね？」

薄暗い倉庫の中、老人は書面を見ながら尋ねた。銀色の髪の少年はパイロットスーツを調整し、ヘルメットを抱えながらエレベーターに乗り込む。

「恐らくは。ああ、彼は日本人でして、名前は」

「いや、いい。私は日本語にも詳しくてね。少し見かけない漢字だが、これは、そう、ハヤブサくんかね」

オッド・クラフティは頭を抱えたが、薄暗さで運よく老人に見えることはなかった。老いというのはこれだから面倒なのだ。

しかし上官である。オッドはあえて訂正するような真似はせず、ヘルメットを被って調整を始めた。

「その昔、私の母国ではシロハヤブサが国鳥でな。思いがけぬ縁だ。年甲斐にもなく心が躍るよ」

「ファルコ・ラスティコレス。彼に相応しい名称ですね。彼の突飛かつ迅速な操縦は鷹を思わせる」

「そう思つかね。ふむ。ならばこれより彼のコードネームをシロハヤブサとしよう」

老人は立ち上がった。やがて巨大な電子機器に近づくと、設置してあるマイクを手にして、威厳のある重厚な声を響かせた。

「これより我々はG E S日本国本部陥落作戦に移る！ メール搭乗者の諸君、奇妙な動きをする白い機体を捉えたら、無理はするな。その“シロハヤブサ”はクラフティ中佐が仕留める手筈となっている」

圧倒的有利はE Eにある。

そして、それは揺るがない。

時代を知らず、人を知らず、知らぬことを正当化する全ての人類へ制裁を加えねばならない。それと共に革新がやって来るのだ。

新たな時代が、真に知能を有した生物が完全に支配する。生命の頂点に立つ。

その為の第一歩である。

「小手調べは終わる！ G E Sを陥落させる時が来たのだ！ 全軍、出撃せよ！」

「まずいわね」

シェーラ＝マクファールレンはやはり苦い表情を浮かべていた。

MHD機の奪還に失敗した時点で彼らの奇襲作戦は終わったはずである。こうも早く戦闘を行って来るとは思ってもみなかったことだ。それとも、この戦闘には別の理由があるのだろうか？

絶対的な危機だった。EEの空母である“ハネ”と共に、数十隻の大艦体が姿を現したのだ。MHD機の数を確認できていないが、潜伏している数も含めれば多大な数になることは間違いないだろう。加え、これほどの早朝。戦闘準備どころではない。せめてMHD機の対応だけでも急がなければ、GESの電磁バリアは一瞬のうちに砕け散ることとなるう。

「緊急通信！ クォーク機より通信であります！」

「クォーク……まさか、彼？」

「繋げ！」

ブリッジに入ってきたシリンドゥウェイカーが唐突に叫んだ。シエーラは後ろを振り返って、生唾を飲み込む。歴戦の兵士である彼がここまで切迫することは、今までになかった。

『こちらホワイト。出撃準備完了です』

「よし、行け。責任は私が取る。出来る限り数を減らせ」

『了解。出撃します』

これで少しは負担が軽減されるかもしれない。

ともかく、GESの電磁バリアだけは死守せねば、一巻の終わりである。

なめられたものだ、と隼は思った。

出来る限り数を減らせ、ということは、自分に出来る範囲で敵機を撃破しろ、ということだ。つまり、殲滅しろと言っていないの

だ。そして、それを期待してもいない。

事実この状況において、殲滅することは至難の業だろう。
だが。

（敵機はここから見える範囲で八機。空母付近に二十一隻。どうしたもののか）

おとなしく出て行けば蜂の巣である。
しかしそれ以外に方法はない。

（正面突破と、行きますか）

隼は電磁シールドを展開させた。まさかシミュレータでの戦闘経験が生きては、彼女に感謝せねばなるまい。

脚部ブースターをフル稼働させ、格納庫のシャッターを突き破る。

「なんだ、あれ？」

その光景は、異様だった。

GESと外界を遮るようにして、薄黒い半透明のエネルギー体が膜を張っている。まるでシールド、いや、バリアーだ。

なるほど、と隼は思った。GESの防衛の要はこの電磁バリアだ。これが破られた時点で、GESの命はない。

隼は左腕装着型のシールドを正面に掲げたまま、バリアに突貫した。

続いて余った方の手で電磁レーザーを掴み、跳躍する。MHD機には上部モニターが搭載されていない。センサーのみが頼りである。故に上部からの攻撃には滅法弱い。

空中から照準をあわせると同時、光線がMHD機を頭部から貫いた。

『MHD - 030！　なんだ、上から！？』

そうして背後に着地すると、クオーク機はシールドを解除し、もう一つの電磁レイザーを掴み取った。

MHD機は不意を突かれる形になっている。何も障害はない。力で照準を合わせつつ、クオーク機から放たれた二本の光線がMHD機の二機を撃破した。

（残りは五機だけど、どちらにしる増援が来るだろう）

クオーク機とMHDの五機が対峙する。

人は慣れる生き物だと、かつての学者は語った。隼はそれを今、強く実感している。加えて自分が殺しているのは“人”ではなかった。データ上に映された単なる“機械”である。

冷や汗などかきようもない。

自分には大義名分がある。

だから、容赦なく、ためらいすらなく、隼は引き金を引いた。

「GES全面域展開シールド、50%損傷！　エネルギー供給が間に合いません！」

「ここから艦が飛び立つ訳にも行かないわね……損害状況は？」

「第一、第二メール部隊全滅！　第三部隊もほぼ壊滅状態！」

GESの部隊は全てで八つである。

第一から第八の艦隊に分類され、さらに艦隊にはそれぞれメールによって構成された部隊が配属されている。

その第三部隊までもが壊滅状態にまで追い込まれていると言うことは、おおよそ半分近く戦力が削られてしまったと言うことだ。

「やむを得ん。主砲を展開させる！ バリアの内側から敵の艦隊を撃墜する！」

「無茶です少佐！ そんなことをしたら、バリア自体が……」

「ここで陥落されるよりは多分にマシだ！」

「待つて下さい！」

オペレータの声が轟く。

画面上から発される電子音が、止まることなく響いていた。

「一、二、四、七……敵MHD部隊、現在確認できる範囲では、残り二機です！」

「何かの間違いじゃないの！？ だって、そんな、あの数を」

『こちらホワイト』

最後の電子音が、二回、儚くも小さく鳴ったと同時に、通信が割り込む。

クオーク機からの通信だった。

『出来る限り数を減らしました』

「よくやった、ホワイト少尉！」

シリンドが声を荒げて賞賛する。

「このまま警戒を怠るな！」

『了解』

第七艦隊には、畏怖と興奮の入り混じった奇妙な空気が流れていた。

戦況が明るくなった喜びと、単騎で敵をほぼ全滅させたという、

たった十五にもならない少年に対する明確な恐怖である。

シ lindo ウェイカー少佐だけが、只一人、その中で勝ち誇っていた。

（地上戦はこれで大分有利になるはずだ。あとはあの空母を落とせば）

隼は呼吸さえ乱していない。

出来すぎたシナリオだったとしか思っていなかった。最大勢力であるGESとEEの戦いは、あっけなく幕を閉じるだろう。あの空母さえ落とすことが出来れば。

これで一躍自分は組織内での株を上げる。発言力も上がる。何もかもが上手く行き過ぎていることに、少々の不安を覚えなくてもないが、それだけだ。

照準をあわせる。

動きのとろい飛行艦など、電磁レーザーの速度にはかなうまい。

ただ冷酷なまま、隼が引き金を引いた時、だった。

「アラート？」

画面には何も映っていない。

しかし、電磁場兵器の襲来を告げるアラートが嫌らしく鳴り響いている。

「どこだ、どこから？」

それは一瞬の事だった。

ふと脳裏に浮かぶ絶対の道しるべが、隼に唯一無二の正解を教える。かるうじてそれを読み取った隼がクオーク機の装着型シールド

を再度展開させ、何も見えない虚空に構えた。
途端。

強力なエネルギーがシールドに着弾する。機体に強烈なGがかかっていた。クオーク機が地面にくらいつくのが、体を通して伝わって来る。

赤い電磁場エネルギー。

電磁レイザーの改良型 いや、それとは違う何か別の そう、
特殊なエネルギー体。

『これは初めてらしいな。答えは見えないか、同族』

同族。

クオーク機が外部の音をはっきりと拾った。間違いはない。同族。それは、そう言ったのだ。

宙に浮かぶ銀色の機体。

ところどころに赤色の光を、衣服のように身にまとった機体。
どこか刺々しい印象を与える、角ばったフォルムを更に進化させた機体。

『ふん、なるほど。いかに絶対者であろうと、知らぬことは知らないようだな、白き鷹よ!』
「お前は」

敵の動作を読み取る。

動揺しながらも、隼はそれに対応した。銀色の機体は虚空を滑るようにして、真正面からクオーク機と激突する。

より正確には、電磁シールドと赤い光のエネルギー体をぶつけあっていた。形容するならば、それは剣である。電磁場エネルギーを剣の形に固定しただけの強引な設計だった。

しかし、出力の桁が違う。

赤い光のエネルギーは、電磁シールドを圧倒していた。

『目指す場所は同じはずだろう、鷹よ。それとも別か!』

「何を言っているのか、訳分からないんだよ!」

クオーク機の電磁シールドをずらして回避する。敵機体の次の動作が直接頭に伝わってきた。

『予測』通り、敵機体は電磁シールドに赤いエネルギー・ソードを押し付けていた反動を利用して、機体を半回転させた後に切りかかって来る。隼はその『予測』に、右足の蹴りをぶつけた。

機体腰部に命中した蹴りは、しかし赤い光の“衣服”に弾かれる。迫り来るエネルギー・ソードを電磁シールドで抑えながら、クオーク機は身をかめてそれをやりすごし、距離を取った。

『甘いかな、鷹よ。そんなものでは、世界の变革など望めはしない』
「お前も同じというわけか」

日雀隼には、答えが見える。
敵を確実に仕留める為の答えが。敵の攻撃を確実に避ける為の答えが。

だからこの時も、分かっていた。分かってしまった。この敵が、相手が、自分と全く同じものだということ。

日雀隼には、答えが見える。

彼の敵にも、答えが見えている。

5 あかいひかり

善悪の違いなど、立場の違いでしかない。

倫理観など、社会にとつて都合のいいシステムでしかない。

しかし彼らが見る答えとは、それら人の作ったあいまいな答えと全く性質の違うものだ。

未来さえその脳裏に映し出すことが出来る。自分勝手な憶測や予測を、究極的に突き詰めた能力。未来予測の厳密化こそ、答えの見える力の真の意義である。

故に、日雀隼の前に立ちふさがる人間はいない。彼には敵の動作が見える。手に取るように分かる。自分が勝つためのルートが目の前に指し示されている。

だから。

彼に対抗することが出来るとしたら、それは彼と同じ人間だけなのだ。

『だが、この力には弱点が存在する』

銀色の機体がオープン回線のまま語る。

『そして、君はそれを知らない。故に君は私に勝利することが出来ない』

クオーク機の電磁シールドが明滅した後に消滅する。機体スペースが違いすぎるのだ。それもこれも、あの赤い光がもたらしている。何度見ても答えは見えない。まるで何らかのシステムに拒絶されているかのように、赤い光に関する全てが霧に覆われていた。

『なぜそこにいる、日雀くん？』

「お前こそ、どうして俺を排除しようとする？」

『目的の為には手段を選べないということだ』

銀色の機体が着陸する。飛翔ユニット搭載型のメイルが実用化されているというなら、なぜ今まで陸戦に頼って来たのだろうか。メイルは未だ進化途上の兵器である。飛翔ユニットどころか、陸戦での戦闘行為ですら完全ではない。

それならこの敵はどうやって空を飛んでいるのだろうか。考えるまでもない。まず間違いなくあの赤い光の性能だ。赤い光は電磁斥力エネルギーに並ぶ、いや、それすらも超越する代替エネルギーなのだ。量産化されていないが故に、あのエネルギーは生半可なパイロットに制御できる代物ではないということである。

MHD機のフォルムを一回り進化させただけのように見えているが、眼前の機体は全く別のものと断言できるだろう。

『今、分かった。どうやら私と君の能力には違いがあるらしい。』

単純な力比べであれば。

同じ力を持つ者、どちらも勝てないし負けることも出来ない。両者ともに勝つための道が示されている。負けることのない道が見える。だから勝敗は付かない。

ところが実戦における力の差とはそうではない。使う武器の差。戦闘に勝つことは出来ても、戦術に負ける可能性がある。いくら答えの見える人間とはいえ、体力が無限に持続するわけではない。

更には本人の能力が勝っていたとしても機体性能が追い付いていなければそれだけで敗北条件になる。

『許せ、白き鷹。君をこのまま生かしてはおけん』

銀色の機体が纏う“赤い光の衣服”が轟く。蛇口から水を限界ま

で放出したような勢いで光が放射する。

その機体が腰の武装ラックから長銃を取り出した。ごくりと生唾を飲み込む。勝つための道は示されていた。しかし圧倒的な恐怖が隼の肌にひしひしと伝わって来る。

本当にこれで勝てるのだろうか。

他にすべきことはないのか。“赤い光の衣服”の答えは見えない。あれがなんというシステムなのか、あらゆる情報に鍵がかかっている。負けるかもしれない。

いや。

まだ出来ることはあるはずだ。

出来なくてはおかしい。

「一つ聞きたいことがある」

『同族殺しの罪滅ぼしに聞こう。君の最期の言葉だ』

「勝ったつもりでいるのは、お前の見えている答えのせいかな？」

クオーク機が両手の電磁レーザーを収納する。

冷や汗が一滴、コックピットに落ちた。電子音に囲まれた薄暗い空間のなか、隼は恐怖をはねのけるべく、両足に力をこめた。

『もう少し聡明な男と思っていたが。機体性能の差が分からないというのか』

クオーク機が大地を揺らして駆ける。銀色の機体は長銃の照準をクオークに合わせ、容赦なく引き金を引いた。

知覚出来ない速度。見えない攻撃。赤い光の銃弾は、クオーク機の真横を通り過ぎ、GESの電磁バリアに衝突する。

『ほう！』

相手がどう動くのか分かっているのは、両者とも同じである。未来を見ていると言えは格好が付くものの、それほど大したことではない。少しあとの動きが目に見えるだけで、完全に未来を見ることが出来ないのだ。

だが、見えた動きを鵜呑みにしては、同じ能力を持つ者同士、勝敗が付く訳もない。それは先ほどの通りだ。

裏をかくしなかった。

隼は自らの動きを“見て”、それに合わせた敵機の攻撃を避けたのだ。

懷に潜り込み、クオーク機の左腕が銀色の機体を持つ長銃を弾き飛ばす。予備動作で右足をその機体のわき腹へ叩き込んだ。同時、銀色の機体は左腕の電磁シールドで蹴りを受け止める。

『出力が安定しないか……これだからプロトタイプは！』

“赤い光の衣服”が陽炎のようにぶれた。

途端、隼の脳裏に『それ』がよぎる。右足を下ろすと共に、クオーク機は左手で電磁レイザーを取り出した。

銀色の機体が赤い光の剣を生成する直前、電磁レイザーを射出する。“赤い光の衣服”が波のように電磁斥力エネルギーを包み込み、無力化した。

『やはりこれは見えないようだな！』

赤い光の剣が機体の右手に作り出される。そのまま銀色の機体は二発目の電磁レイザーをしゃがんで回避し、クオーク機の左腕を根元から切断した。

『美しき世界でまた会おう、日雀く』

赤い光の剣が届く前に。

クオーク機がいつの間にか取り出していた、もう一つの電磁レイザーの銃口を銀色の機体の腹部へと、強引に叩きつける。

『貴様、見えていたというのか！？』

ゼロ距離で、黄金の電磁斥力エネルギーが炸裂した。

腹部を貫通し、赤い光が消え行く。砂の流れ落ちるように。零れ落ちるように。“赤い光の衣服”は消滅する。

簡単な話だった。

赤い光の答えが見えないのなら、その機体の弱点に関する答えを見ればいい。

もしこの答えの見える力に弱点があるとすれば、相手の思考を完全に読み取れるわけではないというただ一点に限られる。視点によって見える答えが変わるのだから、能力の違いではなく使い方の違いではない。

『肉を切らせて骨を断つ……なるほど日雀くん、君を見くびっていた。わざと隙を見せて読み勝つとは恐れ入ったよ』

クオーク機の右腕が炎上する。“赤い光の衣服”に触れたせいだろう。読みきったつもりでいても、性能が追い付いていない。痛み分けだった。

「まだ勝つつもりか？」

『私に挑発は通用せんよ。情報を引き出そうとは良い心がけだがね』

隼は心の中で舌打ちした。わざわざ相手の会話に乗った意味がない。そうそう上手く行くとは思っていなかったが、収益はゼロだ。いや、本当のところ、生き残っただけでも儲けものなのだろう。

得体の知れない兵器を相手にして、あわよくば殺されているところだったというのに。

しばらく両者は対峙していた。敵の動きは見えている。それは相手も同じだ。

銀色の機体の出力は安定していない。腹部を貫かれ、辛うじて状態を保ってはいるが、戦闘を継続するのは難しいはずである。そして、それはクオーク機も同じだった。

『Electromagnetic Energyのオッド・クラフティ中佐だ。またあいまみえよう、同族の少年』

銀色の機体がわずかな赤い光の残滓を展開させ、飛翔する。はるか上空に見えるEEの大艦隊は撤退しつつあった。

オッド・クラフティ。厄介な相手である。あのレベルが五万といれば、苦戦は必須だろう。何か対策を考えなくてはならない。

そして、あの“赤い光の衣服”。

答えの見えない敵は、むしろ“赤い光の衣服” 正体不明の機体性能の方だろう。

右腕の炎が右肩部分にまで侵食する。隼はコックピットのハッチを開放し、飛び上がった銀色の機体を見据えていた。

A x i o n T r i g g e r アクシオントリガー

5 あかいひかり

「 以上が、本日八時一八分より襲来したEEの軍隊による損害状況です」

GES大会議室。

GESの重役が一室に集い、今朝の唐突なEEの襲来に関する会合を行っていた。実質、それは単なる結果報告の場と化していたが、それを指摘できる者はこの場にいない。

「全く、民間人を実験機に放り込むだけでなく、階級まで与えるとは……ふん、またあの小娘の仕業か。まあよい」

「それより、かのホワイト少尉のスパイ疑惑に関する件だが、マクファーレン司令」

EEから襲来した、正体不明の技術を搭載しているという銀色の機体。現状で把握できているデータでは、赤い色の光を身に纏うという。

それがホワイト少尉、日雀隼との交戦時にオープン回線で『同族』と言い放った音声データが残っているのだ。

「彼への処分はどうするのかね」

「抹殺処分としたいところではありますが」

ホワイト少尉の、日雀隼に対する印象は最悪である。民間人であったのに、MHD機を持ち帰ったと言うだけで第七艦隊に艦隊独自の判断で入隊し、階級を与えられてしまった。

元から怪しい人物であっただけに、今回の疑惑は強く出ている。ただでさえ保身的な上層部のこと。疑わしきですら罰するのが、G

E S上層部のやり方だ。

シエーラはいたって冷静な表情で、淡々と述べた。

「あの娘の機嫌を損ねてはG E Sの技術の進歩は望めません」

まずは建前で相手の言動を封じ込める。シエーラの演出は完璧だった。相手の機嫌を取ると同時に、相手の言動に制限をかける。この時点でG E Sの上層部が反論できる幅は狭められた。

シエーラはさらに制限を掛けて行く。

「それに、彼は実験機のモルモットでもあります。ひいては、一週間の軟禁処分といたしましょう。加えて常に監視をつけます」

「不満がないといえば嘘になるが、仕方なかるうな。して、監視と
いうのは？」

「未熟者ですが、私の実妹ならば極自然に彼の監視を行うことが出来るでしょう。スコアフィフスの面々とも繋がりが 있습니다。彼らにも協力を要請するつもりです」

ぱん、と老人の一人が手を叩き合わせた。

それが会議終了の合図となり、その後誰一人声を発さず、各々退室する。シエーラは誰もいなくなった会議室で、大きな溜息をついた。

権力にしがみつく無能な老人たちに呆れているのだった。少し機嫌を取って意見を受け入れている振りをするだけで、ころつと騙されてくれる。楽ではあるが、失望の念を感じざるを得ない。

（それに比べてあの子は有能ね）

彼ならば、と期待してしまう側面もあるのだ。

この不毛な戦いを。私利私欲に走る軍人たちを。保身のことしか

考えない人間すらも、どうにかできるかもしれない。彼の才能さえあれば。それほどまでに、日雀隼の戦果は凄まじかった。

だから庇ったのだ。頭の劣った老人たちを騙すなど、ろくに手間もかからない。今ここで彼を失えば、あの実験機を真に使いこなせる人間はいなくなってしまうだろう。彼の力を利用しない手はない。

日雀隼。

唐突に現れた一般人。わずか十五歳にしてオトナと渡り合うコードモ。

偶然なのだろうか。それとも彼の策略なのか。

こうなることすら、あの少年は予測の範疇だったのかもしれない。

(っと、忘れないうちに……)

シェーラは携帯端末で日雀隼を呼び出した。

「そういうわけだから、少尉、ティーナを監視につけるわ。一週間、GESから外出するのを禁止します。あなたの処分は以上です」

「はっ！ 感謝します、司令」

眼鏡の位置をくいと直して、隼は一礼する。ここが軍ではなくて、もし彼が天才的な実力を発揮していなければ、彼が恐ろしく素直で良い子に見えたのだろうが、手遅れである。

結果として、彼の實力の底は周囲に知られてしまったのだから。もはや彼の行為は歳相応のものではなくなっている。少し前であれば、まだ子供だからという油断があっただろうが、今のシェーラにはそれがなかった。

本気で彼と話し合わなければ、負ける。彼の策略に吞まれる。彼が何を考えているかが定かでない今、油断は死を意味していた。

「ところで、あなたの实力を見込んで話があるのだけれど」

そこで、シェーラは一步踏み込むことにした。彼とは話をしておかなばならない。懐柔、という意味合いも勿論あったが、単純に興味があるのもあった。

天才とはどういうものなのか。

それとも、自分が勝手に彼を天才扱いしているだけなのか。

知識欲と言えば聞こえはいい。だが、嫉妬や羨望から来る言い訳だろうとシェーラは思った。彼を天才と言うことで、彼を利用することを正当化しようとしているのだ。年端も行かない子供だという事実を覆い隠そうとしている。

我ながらずるい人間だなとシェーラは思って、隼の言葉を待つ。

「どのようなご用件でしょうか」

「そう堅くならないで。あの実験機のことよ」

隼の表情が変わった。シェーラはその微細な変化を見逃さず、しっかりと捉える。

やはり、そうだ。彼はただの天才ではない。何か 正邪ははっきりしないが、何かを抱いている。目的を持っている。考えを持っている。ただものではないのは、何もメールの操縦技術だけではない。

社会の傀儡じゃあ、ない。

「知りたくないかしら？ あの実験機は誰が作って、どんな機能が搭載されているのか」

「……知りたいと言えば、知りたいのですが」

「私の前では猫を被らなくてもいいのよ、日雀くん。最も、あなたが被っているのは猫なんて可愛らしいものではないでしょうけれどね」

さすがに限界だと悟ったのだろう。隼は深くため息をついてから、鋭い眼光をシェーラへと向ける。

それでいい。馴れ合うつもりはなかったが、小物ぶったところで隼には既に明確な実績があるのだから、下手に壁を作るコミュニケーションは互いの為にならないはずだ。

「どのようなおつもりですか？」

「あなたがどうするのか、興味があるだけよ」

嘘は付いていなかった。どうせ騙しきれはしない。シェーラは隼と自分の能力の差を本能的に感じ取った。

自分が凡人の才能しか持っていないことに比べ、彼は生まれたときから全ての人間を越えているのだ。シェーラはそこに利用価値を見出した。

だが、もっと違う。それとは別種の興味が沸いてきているのも事実だと認めなければならない。彼が何を見ているのか。何を考えているのか。それに興味を惹かれる。

「実験機^{クオーク}はね、春花が作ったの。私も詳しくは知らないけれど、あの娘が作ったのは間違いない」
「彼女が？」

語尾が上がっていたものの、隼は全く予想外の言葉をはかれた人間の様子には見えない。きっと分かっていたのだ。
分かっているのに、分かっていない振りをする。愚者を装う事は自らに利益しか齎さないとよく知っているのだろう。

「ええ。それから、これがあなたの知りたかったことじゃないかと思っただけ」

目の色が変わった。ポーカーフェイスに見えて、彼は常に本気である。最も、これが偽りの姿だと言う可能性も否定は出来ない。

「レプトンが使っていた“赤い光の衣服”……ですか」

「レプトン？」

「銀色の機体の名称です ああ、相手のパイロットが名乗っていました」

「アレね。そうよ。あの機能が実験機^{クオーク}にも搭載されている」

静かな空気が流れる。珍しく、隼の表情から余裕が消えていた。稀代の天才も、分からないことはあるようだ。やや親近感を覚えたシェーラが、ゆっくりと告げる。

「NEOデバイサー。そう聞いたことがあるわ」

触れたもの全てを燃やし尽くし、機体のエネルギーを格段に上昇させる拡張された特殊電磁場。

シェーラの言葉を反芻しながら、隼は自室への道のりを歩いていた。

所詮は伝聞だ。確定情報ではない。証拠もない。結局分かったことはNEOデバイサーという名前だけである。

オッド・クラフティの駆るレプトンの“赤い光の衣服”はプロトタイプであって、出力が安定していなかった。ではクオークに搭載されているNEOデバイサーは完成品なのだろうか？

未だに答えは見えない。

ありとあらゆる事柄が闇に吞まれ、潜み、覆われる。

なら、知っている人間に聞けばいいじゃないか。

それもそうだ。クオークを作ったのは前空春花なのだから、彼女に聞けばいい。NEOデバイサーの使い方を。答えなければ答えさせればいいのだ。

なぜすぐに思い当たらなかったのか、不思議なくらいである。

寮へ向かうための廊下へ足を踏み出した瞬間、カツカツという足音と共に、人影が目の前に現れた。

「やあ、また活躍したようだね。どんな気分だい、白き鷹？」

アルフレッド「ロスチャイルドが隼の前に立つ。抑揚のない口調だった。いつも彼が浮かべている柔和な微笑といえば聞こえはいいが、隼に言わせればただのにやけ顔だ。

よもや自室へ辿り着く前につかまるとは思わなかったが……隼は彼のしつこさにやや観念して答える。

「残念に思っているよ。面倒事が増えて」

「それは欲張りすぎじゃないかい？」

「……悪いな、急いでるんだ。俺に構ってる暇があったら、実践に向けて訓練でもしておけ」

「前空春花なら第七艦隊のブリッジにいる」

不意を突いた台詞に、隼はあやうく拍子の抜けた声を上げるところだった。

アルフレッドは変わらず人の良い笑みを、怪しさに塗れた笑みを浮かべている。彼がスコアフィスの中でも群を抜いた成績を持つ事は隼の耳にも入っていた。だから彼が春花を知っていたことに疑問を抱いたわけではない。

彼がこの自分に協力的な姿勢を見せたことに驚嘆したのだ。

「NEOデバイサーには僕も興味があつてね。どうせ君にも見えな

いんだろう?」

そうして、隼ははっと気づく。そういえば彼も同じだった。オツド「クラフティの言葉を借りるならば、同族である。

単なる予測が、ここで確定した。アルフレッド「ロスチャイルドは自分と同じ人間である。間違いなく。その力に差はあっても、彼も答えの見える人間だということだ。

「君の超人的な働きを知って確信したよ。敵を全滅させたってね。七十八機もいた敵部隊をかい? 見るまでもない、君はやはり僕と同じ人間だ」

「わざわざそんなことを俺に伝えるなんて、お前は何を考えているんだ?」

「僕たちが見ているものは同じはずだろう、白き鷹?」

果たして、本当にそうなのだろうか?

オツド「クラフティの见えている答えと、アルフレッド「ロスチャイルドの见えている答えと、この自分が见えている答えが全て必ずしも一致すると言うのか?

ならばなぜ全ての同族が同じ行動に出ないのか。環境の違い?

選択の違い?

それに対する答えが出ない限り、彼らを信用することは出来ない。

「何を見ているっていうんだ?」

「全世界の人間が幸福になるべくしてなる、理想的な世界構造さ」

「それが俺と同じだって?」

「違うのかい?」

否定は出来なかった。だが肯定も出来ない。隼が創り出そうとしているものは、厳密に言って人間が幸福に生きられる理想的な世界

なのだろうか？

そうとは思えなかった。隼はただ、世界にとって害悪でしかない人間を滅ぼした上で誰もが真に平和で平等で、自由な世界を創ろうとしているのだ。

社会の矛盾点を排除し、人があるのまま純粹で、誰もが誰にも優しい世界。自分の事しか考えていない傲慢な人間を滅ぼす。一から作り直すのだ。それが結果として人の幸福になるとしても、その過程は残酷なものだろう。

彼が本心からそう言っているのであれば、全く同じとは言えない。

「まあ、いいさ。どちらにしろ君が僕の敵になることはないのだから」

「分からないな。いずれお前が俺の前に立つ日が来るかもしれないぞ」

「そうだとしたら、楽しみにしているよ。君と戦える日をね、白き鷹」

最後まで柔和な微笑を崩さずに、アルフレッドは隼の真横を過ぎて去った。

第七艦隊。その戦艦は強大かつ巨大である。第八艦隊まである飛行艦隊のうち、ナンバー七を称されたエリート部隊。それが第七の艦隊だ。

噂によれば第八艦隊は頭のおかしい連中の集まりらしいが、いかんせん隼にはあまり興味がなかった。GESの部隊は数字が大きくなるほどその能力・性能が増すということだけ分かれば十分である。思えば、GESはまだ謎ばかりだ。必要になれば自ずと見えるだろう。今ここで優先すべきではない。さしあたって、問題なのはどうやって彼女からNEOデバイサーに関する情報を引き出すかであ

る。

もしも彼女に教える気があるのなら、既に話を聞いていてもおかしくはなかった。彼女は恐らくデザイナーだ。製作者といっても実際に作る方ではない。故に、NEOデバイサーの構造を直接的に熟知している人間なのだ。

「あ、日雀くん！」

ブリッジへ向かう途中の通路。彼女は目を合ったことに気づくと、満面の笑みをつくって駆け寄ってきた。

その光景が、とても彼女には似つかわしくない。白い軍服もどこか場違いなふうに見えて、隼は自分の感覚そのものに違和感を覚えた。

「お疲れ様です。所用が片付きましたので、護衛任務に戻ります」

「お疲れさま。そんなに堅く言わなくてもいいのに」

「軍務ですから」

彼女はどこか軍人として甘いところがある。それも彼女に対する違和感に拍車をかけているのだ。

たとえば　　しいて言うのなら　　彼女は軍人になるべき人間ではないのかもしれない。彼女は軍人として相応しい人間ではない。いや、何か表現がおかしい気がしてならない。答えが見えないということが、これほどものかしいとは。

「あたしも事後処理が終わったから……そうだ、クオークちゃんのことなんだけど」

「クオークちゃん？」

「うん。損傷が酷かったから修理してるんだ。何か要望があったらカスタムするから言ってね」

しかも、隠し事が下手だ。

まず間違はなく、彼女は軍人として考えれば素人だろう。ただの民間人である。ド三流といいいい。そう考えれば彼女が特別扱いを受ける理由はひとつしかない。

才能。知識。実力。それらの総合能力こそ、彼女の利用価値というわけだ。

クオーク機は実験機と呼ばれていた。にも関わらず、特別他のメイルとの相違点は、その運動性能や通信機器といった基礎的なことに限られている。どういった意味での実験機なのか。それはNEOデバイサー搭載機だという、その一点のみに理由があるのだ。

そして、彼女の特別待遇。NEOデバイサーの特異性。実験機。それらを作ったのが前空春花だという事実。

つまり。

NEOデバイサーを設計できる人間は、彼女しかない。もしくは、彼女を含めたほんの数人しかない。だからこそその彼女の待遇。更に言えば、見えない『答え』を彼女は知っているのだ。

「近接戦闘用の新たな武装と、ワイヤーロープを標準装備していたきたいのですが」

「あ、待って、メモするから」

隼はいかにも人の良さそうな笑みを浮かべる。

彼女に対して自分の優位性ははたらかない。ならば正攻法で行くまでだ。

そう、社会のルールに則った正攻法で。

「それから」

「うん？」

「NEOデバイサーの使用方法を教えていただけませんか、前空さ

ん？」

春花の表情が凍りついた。なぜその名前を知っているのかを疑問に思っているのだろうか。しかし遅い。彼女は周りの人間に釘をさしておくべきだったのだ。

この日雀隼に、NEOデバイサーの件を知られないようにすべきだと。

彼女が何を考え、企んでいるのかは分からない。だがNEOデバイサーの件を教えなかったということは、絶対的な力を隼に与えなかったということだ。その時点で、彼女は味方だとは思えない。

「えっと……な、なにかなあ、それ？」

「あなたに隠し事は無理ですよ、前空さん」

そして、彼女には驚くべきほどに、軍人としての才能が無い。

「もはや敵機のNEOデバイサーは実用化されています。クオーク機の運動性能をもつてしても、NEOデバイサーなしでは自殺行爲です」

段々と彼女の表情に陰りが生まれる。

目を逸らす。

それは明確な意思表示だった。『あなたに話すつもりはない』。信用されていないな、と隼は思った。

「今後その機能を使わずに戦うことは出来ません。教えていただけませんか？ 教えていただければ、代わりにどのようなことでも」

「そついう問題じゃないの！」

透き通るような声がその場に響き渡る。

隼は彼女の拒否の叫びに、なんとかポーカーフェイスを保つことには成功したが、内心は驚きに満ちていた。まさか気弱そうな、人の良さそうな彼女がこれほど強気に出るとは思っても見なかったのだ。

「だから……その、デバイサは……。ごめんなさいっ！」

そうして、彼女は背を向けて走り去って行く。なんだか傍から見たら誤解を受けそうなシチュエーションだった。

とはいえ。よほど知られたくない事情があると見える。隼はこっそりと舌打ちした。NEOデバイサーなしで“赤い光の衣服”と戦わなくてはならない。今から対策を考えておくべきだろう。

計算違いが、まさか味方のほうに出てくるとは。やはり前空春花はイレギュラーだ。だがあの頑なな態度から言って、脅迫は通用しないだろう。意外にも芯は強いようだ。

「女の子を泣かすなんて。あなたがそんなデリカシーのない男だとは思わなかったわ、シュン？」

今日は色んな人が自分の近くを通り過ぎる日だ。

オッド「クラフティ、シエーラ」マクファーレン、アルフレッド
「ロスチャイルド、前空春花。」

「あいにくと、女の子の扱いには慣れてないんだよ、ティーナ」
「そうなの？ とてもそうは見えないけどね」

なんとしてでもNEOデバイサーの情報を引き出さなければなら
ないというのに。

神様というものはなんて身勝手な存在なのだろう。

「今日からあなたの監視役に任命されたティーナ」マクファーレン
よ。よろしく、天才パイロット君」

6 こころのかべ

ティナー・マクファールレンが優秀な人間だということはしっかりと理解している。

だからといって、『危険な人物』に自分の妹を監視させたりするだろうか？ よほどシェーラ・マクファールレンは実妹を嫌っているのか、或いは前提条件が間違っているのかもしれない。

自分は飛行艦隊の中で最も偉い人間に信用されている、ということなのだ。つまり妹を監視につけたのは単なるカモフラージュ。

（思わぬところに駒が出来たな）

心の中でほくそ笑んでいる余裕は 実はない。前空春花からNEOデバイサーの情報を引き出せなかった以上、“赤い光の衣服”の対策を考えなければならなかった。

明確かつ安全な対策がない今、やもすれば、“赤い光の衣服”相手に全滅と言う状況すらありうるのだ。

……だと言っのに。

「ハルカ、なに食べる？」

「スパゲッティにしようかなあ……でもハンバーグ定食も……」

「昨日もハンバーグ定食じゃなかった？」

「でへへ」

なぜか自分は今、護衛対象の前空春花と共に学生食堂にいる。昨日の一件を引きずっているせいで気まずいままだが、時間が解決してくれるだろう。

ほとぼりが冷めた頃に機会を伺って再度訊ねて見るのもありかもしれない。……十中八九、無理だろうが。

最も当分は監視役のティーナ・マクファーレンが同行するから、この何とも度し難い不快な空気は彼女の明るさで振り払ってくれるはずだ。

監視される生活が始まって三日。日雀隼がGESに来てから、四日目の昼のことだった。

A x i o n T r i g g e r アクショントリガー

6 ころのかべ

「毎日毎日読書ばつかで、よく飽きないわ」

前空春花を第七艦隊の自室まで送り届けてから、隼は監視役のティーナと共に図書室へとやって来た。彼女の言うとおり、隼は本ばかり読んでいる。

表現的には読み漁っていると言った方が、わりかしの確である。手当たり次第、興味を引いた本を読んでは戻し、読んでは戻しを繰り返していた。そんなことをしているのにも、ちゃんと理由はある。まず、蔵書量が大問題なのだった。

一つ一つを読んでいたら、日が暮れるという話ではない。図書室から図書館へ改名すべきだというのが、隼がこの“図書室”へ来たときの第一印象だ。そこから分かるとおり、室内はやけに広い。

ところが、流し読みだとしても単語さえ頭に入れば　あるいはタイトルだけですら　隼には全てを読み取る能力がある。すなわち、答えの見える力であった。これ一つで、本をじっくり読んで記憶する必要などなくなってしまふ。

だから、棚の端から端まで隼は情報を求めて彷徨っていた。もちろん目的はNEOデバイサーである。

「しっかし、まるつきりシュンって読書タイプよね。運動なんてからつきしダメそうなのに」

「運動は得意じゃないよ」

「そうかしら？」

メイルの操縦を運動と呼ぶのならまだしも、総合格闘技とか球技だとかは才能がない、と隼は呟くように言った。

「声が小さいわねえ。もっと大きな声で喋りなさいよ」

「図書室は静かにするのが鉄則じゃないか」

「古っ！　半世紀以上前のジョーシキじゃない」

「君の国では廃れてたかもしれないけどね」

ばたんと本を閉じて棚にしまつてから、隼はティーナの瞳を睨んで、彼女の唇に人差し指を重ねた。

「O n g o i n g i n m y c o u n t r y . O K ? 」

その、隼が行った思いもよらない仕草に驚きを見せたティーナだったが、それも一瞬で、しっしつと隼の人差し指をはらった。

いかにも渋々といった動作で口に手を当てると、ティーナはすぐ近くの長テーブルの片隅に座り込んだ。行儀がいちいち欧州的だなと思いつつも、隼は次の本を棚から取り出して、表紙をめくる。

「英語も出来たのね、あなた」

「多少なら出来るさ。便利なアシスタントが付いてるからね」

「ナニソレ？」

「アシスタントはアシスタントだよ。それ以上でも、以下でもない」

苦い表情をするティーナ。思うと、このGESにいる学生は非常に表情が豊かだ。様々な国の生徒が集まって来るからだろう。雰囲気的にもかなりオープンで、外交的である。

いかんせんGESの軍人らにポーカーフェイス気取りが多いから、隼は少しだけそのギャップに悩まされた。気分の切り替えが難しくていけない。

アルフレッド「ロスチャイルドといい、前空春花といい、積極性に長けて感情表現が多い。それだけこの開けた環境によって培われて来たということだろう。

社交性が、だ。

「ふうん。ま、どうでもいいけどね。それよりハルカとあなたって、一体どれくらいの付き合いなの？」

「それが俺もよく憶えてないんだ」

未だ、前空春花に関する答えは闇に包まれている。

そもそも物心が付く前であれば、同じ年である彼女のことだから、同じく憶えているはずがないし、ただでさえ記憶力が優れているのだから忘れるなんてこともありえない。

もし彼女が自分と本当に知り合っているのだとしたら。それはいつ、どこで、どんなときに知り合ったのだろう。

「何か前空さんから聞いてないか？」

「うーん？」

しばしティーナは顎先に手を当てた後、ぱつと笑顔を咲かせた。

「すっごく良い人！」

「は？」

「めっちゃめっちゃ優しくてカッコイイ！ 頼りになる！ 頭も良くてオトナっぽい！ なにをしても上手で様になる！」

「って、彼女が言っていたのか」

「うん」

いよいよもって、別人である可能性が高まって来たな 隼は自分がその噂に違わぬ人物だったかどうかを懸命に思い出そうとしていたが、思い出すまでもない。そもそも彼女とであったときのことすら思い出せないのだから。

もしくは自分が重度の解離性同一性障害を患っているかだ。それしか考えられる可能性はない。

「君は俺がその噂通りの男だと思うか？」

「全然思わない」

間違いない。前空春花は日雀隼と同姓同名の別人と会ったのだ。

「それはたぶん、俺じゃないな」

「転んだところを助けてもらった、なんてエピソードにシュンが登場するわけないもんねー」

ふつと脳裏をよぎる、あの感覚。前空春花に関する答えが見えない中で、闇の中に映し出された、ほんのわずかな光。

しかしもう少しで届きそうなそれが、本当にわずかなところで指先を離れる。

思い出せそうで、思い出せない。けれど忘れていくはずのない記憶。

（転んだところを、助けた？）

誰も彼も見ても振りをする中。

転んだ少女のことなど気にもとめずに明日の話。

その目に浮かぶ涙と。

泣かない強さを抱いた瞳。

（なんだ、これは　？）

憶えない記憶が自分の内側にある。見えない心の壁を通して見える。他人に対する失望と、弱者に対する同情。

誰の記憶だ、これは？

「おや、こんなところで会うとは奇遇じゃないか、日雀君」

ぷつりと映像が途切れる。

眩しさに目を細めて、隼は現実の目の前にアルフレッド・ロスチヤイルドとそれを不服そうに睨み付けるティナーの姿があるのを認識した。

類は友を呼ぶ、というヤツだろう。いや、彼との間柄は『とも』なんて生易しいものではない。牛は牛連れ馬は馬連れが良いところだ。

相容れないというほど仲たがいをしているわけではないけれど、隼としては、そんなに積極的に関係したいタイプの人間ではなかった。理由は明言するまでもないが、同類は相容れないのだ。

「奇遇ね、奇遇う？　どうせ天才パイロット君にストーキングして

いたんでしよう、スコアトップ」

「また君か……マクファアーレンさんは彼に気でもあるのかな」
「それはあなたでしょ」

どうしてこの二人の仲は険悪なのだろうか。彼らのプライドが両者の心中でせめぎあっているかのように、二人はなんとも折り合いが悪い。

ティーナ「マクファアーレンの攻撃的な性格と、挑発的なアルフレッド」ロスチャイルドの言葉遣いの相性が悪すぎるのだ、と隼は思った。

「日雀君、首尾はどうだい？」

すぐに矛先をこちらへ向けて来る。少し 実のところかなりうんざりして、隼は自暴自棄になりそうだった。

「芳しくないな。聞くまでもないだろ」

「確かに聞くまでもないがね、君が隠していないとは言い切れない。隠蔽工作などされては敵わんよ。そういうのは一部だけにして欲しいものだけ」

「あいにくと隠蔽工作には手こずっているくらいだ。出来ればお前にご教示願いたいものだよ」

「いいや、僕もそっち方面には長けていないんだ。お互いに苦労するものさね」

ティーナが首を傾げたのを見て、隼は一息つく。水面下で行われる危険な会話である。知られたところで恐らく彼女には何も出来ないだろうが、人の口に戸は立てられない。どこから誰の耳に入るか分かったものではない。

しかし、監視役と言いながら随分なご愛嬌だ。これでは監視の意

味がない。彼女には才能がないとしか思えなかった。スコアファイブに名を馳せるとはいえ、彼女も人の子だということだろう。

同族には遠く及ばない、単なる若い『おんなのこ』だということだ。

可愛いものだ、と隼は思った。何を考えているのか分からない前空春花よりもずっと彼女の方が分かりやすい。いや、利用しやすい、の違いかなと苦笑してみる。

「期待しているよ、天才パイロット君。僕には出来んことをやってみておくれ」

「何言つてんの？」

それが出来ないからここに来ているのだ、とはさすがに言えなかった。

ともあれ、まずは“赤い光の衣服”、その対策だ。機能に頼るのは不可能だ。ならば技術でなんとかする他ない。

「そうだな、じゃあ、少し付き合ってくれないかい？」

「うん？ 付き合う？」

重低音が腹の底に響く。巨大なクレーンが白い物体を吊り上げ、組み合わせ、構築して行く。青白い火花が散る。修復途中のクォーク機である。

プラントに入って来た二人を開発の担当者がちらちらと盗み見る耳を澄ませば、あれが噂の、などと聞こえてくるものの、隼はそれほど良い気分ではない。

ここに来たのは他でもなかった。

「君も見えていたと思うが」

クオーク機のコクピットに繋がる昇降機に乗りながら、隼が前置きする。

「敵機の使う“赤い光の衣服”は脅威と言っている」

「ああ、アレね。で、なんでわたしが借り出されたのかしら？」

「正直な話、打つ手がないんだ」

装甲の調整をする整備士に一礼してコクピットに乗り込む。単座式であるため二人が乗り込むと非常に狭いが、窮屈というほどではなかった。

いや、撤回しよう。窮屈だった。ティーナの柔肌が隼の体に触れ、なんとも言いよどんでしまう。気を遣ったほうがいいのか、気にしない方がいいのか。馬鹿らしい悩みだと思った。

隼はシステムを起動して、戦闘途中に解析していた“赤い光の衣服”のデータの一部を参照する。エネルギー濃度、予測出力、そのどれもがクオークのそれを上回っていた。

「なにこれ、スペックが違いすぎるじゃない」

「多少は技術で埋められる。ただ、未完成でコレだ。完成したらたまったものじゃない」

データディスクを入力すると、GESの監視映像から映された、戦闘時の映像が画面に表示する。

「この映像、わたしも見たけど。いくらなんでもこのスペック差を埋めるのは無理があるわ」

「それでもやるしかないだろ」

憂鬱な気分で隼はデータを解析して行く。

同じシステムさえあれば対処のしようもあるが、“赤い光の衣服”はエネルギーに作用するシステムだ。機体制御や特殊な装備があつても、機体出力で負けていては勝ち目がない。自転車では自動車に競うことが出来ないのと同じだ。

衣服であるがゆえの防御性と、出力としての攻撃力。全てにおいて下回ることになる。

「ちょっといい？」

のそつとティーナが身を乗り出す。隼の片膝に座る形になるのでどうにも居心地が悪い。自分も人の子だということを痛感せずにはいられなかった。

ぱちぱちと手入力で何らかの数値を入力して行く。画面には敵機の推定出力量とそれを打破するためのエネルギー量が計算されていた。

「現状のビームじゃ無理ね」

「ビーム？」

「電磁レーザーよ。レーザーなんて名ばかりでビームみたいなものじゃない、あんなの」

その理屈はどうなんだ、と思つたが、もちろん口には出さない。

「“赤い光の衣服”の防御性ね。ん？もしかして“赤い光の衣服”って、実弾も防ぐの？」

「試したことはないけど、機体のまわりに炎をまとうているようなものだよ」

「でもそれだと、自分の武器も持てないはずよね」

ふつと隼の脳裏にあのときの映像が浮かぶ。レプトンは長銃を持っていた。試したことはないが　もし長時間あの“赤い光の衣服”に触れていれば、燃焼してしまうはずだ。

いくらエネルギーをまともっているとはいえ、ダメージを無力化することは出来ない。ただ、電磁斥力のエネルギー波を飲み込んでしまふという性質上、ダメージを与える手段は前回のようなゼロ距離射撃に限られる。

「もし、もしよ。“赤い光の衣服”ってやつは防御性にタイムラグがあるとしたら、実弾で何とかできるんじゃない？」

「実弾本体は防げてても爆風までは防げない？」

確かにクオーク機の“蹴り”を、レプトンはシールドで防いでいた。あのときは出力が安定しなかったせいもあるが、もし物理攻撃を完全に防げるとすれば、シールドは必要がない。

つまり、電磁斥力エネルギーを使わない攻撃なら。

「“赤い光の衣服”は電磁的なエネルギーを無効には出来るけど、物体を一瞬で溶かすような、そんな作用はないんじゃないかしら。もちろん、エネルギーの塊だから触ってたらヤバイと思うけどね」

「一理ある、いや、良いアイディアだ」

「え？　そう？」

頬を染めて照れくさそうに掻くティーナ。

「ワイヤーフック、ワイヤーの先端に刃を装着させるか？」

「素直に実体のあるブレードで良くない？」

思案顔でやや考えたものの、隼は肩をすくめる。

「赤い光の衣服」相手に近づきたくないんだ」

近距離というのは、下手をすれば一瞬で勝負が決する。ならば少しでも生存確率を上げるために、距離を取っておくのは自然なことだ。

いや、既にそういう話ではない。

いかに強力な答えの見える力といえど、保険はかけて置かねばならない。そういうことだ。敵が同族である以上、読み違えたら一貫の終わりなどという状況は最も避けたいことである。

しばらくして、二人が出力のデータを解析していると、中年の男がコクピットを覗き込んで来た。

「どうしたのかね、新人？」

「対策を練ってるのよ。邪魔しないで、バース？」

「おお、怖いねえ」

怖がっていないだろうに、と隼が呆れて溜息を付く。また変なのが増えた。年のころは中年、壮年といったところだろうか。白髪交じりの短髪をばさばさとかいている。

バース。レジー「バーゾリア。愛称か。納得して隼は作業を続ける。どうせ名前なんて憶えないし聞く必要もないだろう。

「兄ちゃん、なんかご要望はあるかい？ 俺や、これでもちよつとは偉いんでね。あんさんが望むものならなんでも付けてやるよ」

「クオーク機の開発担当者ですか」

「おうよ。コイツは俺の子供みたいなもんさ」

NEOデバイサーの発動条件までは知らないか。ここに来てまた前空春花が造った人、ではなく、設計した人である説が濃厚になる。

からからと愉快そうに笑いながら、バーズはコンコンと機体を叩く。否、そんな生易しい音ではないかもしれない。

「お前さんのお陰でコイツも喜んでるぜ」

「はい？」

「シュン、相手にしちゃだめよ。バーズは頭がおかしいから」
「ひっでえなあ」

こいつも喜んでいて、とは、クオーク機のことだろう。

それはおかしい、と隼は思った。喜んでいてはずがない。機体を乱暴に扱っているというのに。そもそも機械意志なんてものが搭載されているわけでもないだろう。

嫌がっているの間違いじゃないかとは、あえて訂正しなかった。どうせ無駄だろうし、たぶん、本当に頭がおかしいのだ。

「では強固なワイヤーの先端にアームを付けて下さい。それを二つ。設計してデータを送ります。どこに送ればいいですか」

「へえ、設計もできんのかい。そいつはすげえ。データなら下のコンピュータに送つといてくんか」

「アーム？ シュン、何をつくるつもりなの？」

ティーナがすかさず尋ねて来る。

「手首から指先にかけての部分には“赤い光の衣服”が発動していない、はずだ。クレーンか何かで武器を直接奪い取ってしまったら敵は中距離戦における攻撃手段を失う。あとは照準をずらしたり、機体そのものに引っ掛けたり、移動手段としても なんだ？」

「いえ、あなたって……、器用なのね」

機械の塊を介したロボットの操縦に器用はないだろうと思ったが、

あながち間違っではないかもしれない。考え方という意味では、恐らく器用なのだろう。柔軟性がある、とても言い換えようか。

現状のクオーク機の弱点として、最もたるものが武装である。格下を相手にするなら電磁レイザーとシールドさえあればいいが、機体性能で負けている相手に勝つには、その二つでは不十分だ。

あるいは、メールの性能に秀でているからこそその貧弱な武装なのかもしれないが。

監視から解放され自室へと戻って来た隼は、図書室から強引に持ち出して来た書物を読み漁る。

NEOデバイサーの使い方が分ければこんなに苦労はしなくて済むのだ。対等な条件で戦えるなら、その方がいい。

相手はそのあたりにいる凡人ではなく自分と同じ種類の人間なのだから、むしろ対等な条件で戦わない状況を作らない方が賢明だった。

いや、もつと言えば、別方向から圧力をかけて戦うという状況そのものを無くすか。

どちらにしろただの時間稼ぎにしかない。前空春花の気が変わると思えなかった。大きな溜息を付く。

（なんでNEOデバイサーの発動条件を教えないんだ。そもそも、なんで見えないんだろう？ 誰かが答えの見える力に何らかの細工を施したのか？）

“赤い光の衣服”はエネルギー出力を大幅に増幅させる機能である。

もし“赤い光の衣服” NEOデバイサーのシステムが完成してしまつたら。

剣では銃に勝つことが出来ないように、銃ではメイルに敵わないように、圧倒的な力による肅清が待っている。
そうなれば困るのは前空春花本人だろう。
なのにどうして。
どうしても隼には分からなかった。

7 翠嶺

「日雀少尉、あなたの監視を解除します。今後身勝手な行動は慎むよう」

シェーラの言葉に敬礼して答える。監視生活を続けて一週間経った日のことだ。

そもそも続けていても無意味なのだと思っただ。思っていた。ただ、上層部を納得させる為に形だけ取り繕えたに過ぎない。

上層部にしろ、守られている分際で随分と傲慢な態度である。そしてその感想はシェーラも同じであつたらしく、眉間に手をやって溜息をついた。

「全く、頭の堅いこと。GESもそろそろ滅ぶのかもしれないわね」
「少なくとも停滞期には至るでしょう」

ただし、そうなればEEの思う壺である。彼らの思惑は不明だが、GESが抑止力的なはたらきをしている以上、それがなくなった時の光景は想像に難くない。

隼は“見る”。EEの情報を引き出すことを試みて、それが無駄だと悟る。既知の情報以外を集めることはかなわない。その目的、組織構造ともに、全て謎のまま。ここに來て隼は自らの能力を呪った。

確かに、この能力はとつともない威力を持っている。必要に応じてあらゆる情報を取り入れることも出来るし、それは無機物、有機物を問わず、未知のものに対しても作用するのだ。

だが今になって出来ないものが増えて来ている。まるで対処されているようだった。答えの見える力をブロッキングする何かがある。それすらも分からず、隼は鬱積した思いを抱えつつあった。

「妹がお世話になったわ」

「こちらこそ」

最も彼女のはたらきによって隼が動きやすくなったのは事実である。最低限の礼儀は保つつもりだった。少なくとも表面上は、だが。

「それはそうと、出張には同行するのかしら？」

「何のことです？」

白を切ったつもりはなかったのだが、隼はまさに白を切ったと誤解され、シェーラは怪しげな、怪しむような目を向ける。

本当に知らないのだということを知らせる為に、隼は首をかしげてみせた。あまり効果はなかったが。

「新型のお披露目会よ。ああ、新型というのは、メールのね。今回はあなたに乗っている実験機と違って完成品。重装備型と聞いているわ」

「はあ。いえ、全くお誘いを受けておりませんので」

「そう。勿体無いわ！ ぜひ行くべきね！」

隼は話の流れが変わったことを瞬時に覺つて、なんとか元に戻せないかと悩んだ。しかし遅かった。

「今回の完成品はスコアトップのロスチャイルド君にあてがわれた専用機だけあって、彼独自の発想と設計に基づいたものになっているワンオフモデルなのよ。強大な電磁炉の内部で研磨された特殊^{レア}金属^{メタル}を十割組み込んで実験機>クオー&クとは比較にならない重装甲になっているわ」

まず隼は驚いて、次に呆れて、最後に諦めた。

彼女の大人びた、隙のない印象のせいでどうにも忘れてしまうが、彼女も軍人である。軍人には軍人になっただけのれっきとした理由があるはずで、そうでなくとも、軍人というのは自分の身近にある無機物に対して特別な感情を抱いてしまいがちだ。

有名なので言えば、機体にパーソナル・カラーをカラーリングしたり、オリジナリティを出すためにデザインしたり、酷くなると無機物を愛機と称して（それが軍事的に効率的でないにも関わらず）老朽化するまで酷使することもある。

シェーラは目をきらきらと輝かせて続けた。

「カラーリングは青ね。マリンブルー。そもそも繊細なデザインの>クォークに対して、今回のものは重装甲、重装備型。どちらかというと援護向きの重い機体を重装甲にすることで単独行動のリスクも回避するというアイデアね。特にすごいのが新たに開発されたプロトタイプの電磁レイザーで、これは……」

彼女の“講義”はその後一時間におよんだ。

A x i o n T r i g g e r アクショントリガー

7 翠嶺

GES正規軍第七艦隊。これはシリンドゥウェイカー少佐の管轄するフネである。GESの飛行艦隊の中で、ラスト・ナンバーである第八艦隊を差し置いて高い地位にいる理由はそこにあるのだ。

シリンドゥウェイカーは優秀である。

どうやら実験機>クォークの開発を担ったのはシリンドの部下である前空春花のようだし、その実験機のパイロットである隼も第七艦隊の一員だ。

だからお披露目に第七艦隊が招待されるのは当然と言える。

そう、だから隼への伝達が遅れたのはただ遅れただけであって、それ以上の理由はなかったのだ。
多分。

「え？ 第七艦隊ならさきほどイギリスに発ちましたけど」

やられた、と思った。

軍港に第七艦隊のフネは既がない。

唐突にポケットの中にしまっておいた通信端末が鳴った。応答のパネルを押すと不安そうな声が響いている。

「あれ！ 日雀くん！？ ごめんね、あたし、伝え忘れちゃったみたいで！」

「はい、こちらで追い付きますから大丈夫です。>クォークは第三格納庫ですか？」

「えっと」

重たい沈黙と共に、隼に不安が募る。まさか、とは思ったが、そのまさかだった。

「第七艦隊に連れて来ちゃった」

軍港にいたオペレーターの一人が隼の表情を見て慄く。誰の目にも明らかなほど、隼は眉間に皺を寄せて不機嫌そうな顔をしていた。実際に不機嫌というわけではないが、非常に面倒事を起こしてくれたのは確かである。溜息を電話の向こうにわざと聞かせて、隼は答えた。

「分かりました。個人的に何とかします」

「本当にごめんなさい！」

「ああ、構いません。それでは」

なぜ振り回されなければならんだ　隼は思つて、通信端末をポケットにしまいこむ。ひとまずは足を確保しなければならない。海底鉄道を使うことも考えたが、機密面を考えるとあまり良いアイディアとは言えなさそうだった。

事は既に行きたいかどうかという問題ではない。日雀隼の任務は前空春花の護衛なのだ。けっして>クオーク<のパイロットではない。ないのである。

そうしていると、しばらく経ってから隼の背中にぐつんと何かがぶつかった。振り返って見たのは、黒い誰かの頭である。背が小さい。

一歩下がってじっくりと見る。頭の両脇に細くて赤い髪留めを付けている少女だ。おとなしいというよりは、暗い雰囲気を出す黒髪は肩のあたりではっきりと切られている。前髪が長いせいではつとしない印象を受けた。

じっくりと見つめ合う。

じっくりと。

彼女は何かを話そうとして、

前のめりになって、

転びそうだと隼は予感し、

距離的にも彼女が隼の胸に飛び込む形になることが予想されたので、

一歩退いて、

彼女は地面に倒れ込んだ。

すぐに起き上がって、彼女は非難するような視線を隼に向ける。

それでも転んだことが恥ずかしいのか、顔は真っ赤だった。

「何か、お困りの様子、ですか？」

日本語はあまり得意ではないようだったと隼は考えて、彼女の顔色は明らかに変わった。

「そうじゃないです！ そうじゃっ！ わたし、日本生まれです！」

「どうして俺の考えていることが分かったんだ？」

「え？ あ、ああっ……！」

三人目である。

一人目はアルフレッドⅡロスチャイルド。二人目はEEのオッド

Ⅱクラフティ。三人目。それは恐らく、目の前の少女だ。

しかし。

それにしては恐ろしくマヌケだった。

口元をふにやふにやとさせて、彼女は隼を更に非難の眼差しで睨みつけた。疑問を解消するべく、隼は手早く質問する。

「君も俺と同じなのか。でも、感心しないな。人の心を覗くなんて」

そう自分で言うてから、隼は初めて気が付く。答えの見える力、
というのは、相手の心が読み取れるわけではない。ただ相手の情報
から推測したり、相手の次の行動を予測したり出来るだけだ。

では、彼女はどっただろうか。

たった今、確実に隼の思考を読み取った。もしかすると彼女は、また別の何かなのか。こんな力があるくらいだから、別の特殊能力があっっておかしくはない。

彼女は躊躇って、

口を開閉して、

そのまま閉じた。

「なんで話さないんだ？」

「ひっ！」

あからさまに怯えている様子である。隼は面倒になって、彼女の情報を盗み“見る”ことにした。

みようとして、

彼女は手を前にやって、目を瞑る。

ばかりと、脳に電流が走ったような感覚がした。

隼は何が起きたか分からずに、もう一度“見る”。ところが再び電流に阻まれ、思考が停止する。何が起きているのかさっぱりだった。確かなのは彼女の情報を見ることはかなわないということだけ。

「お前、なにをやってるんだ？」

靄の掛かったような、前空春花のものとは違う。EEのものとも違う。明確な“見る”ことに対する拒絶に、隼は驚きを隠すことも忘れていた。

少女は俯いている。目を伏せている。けれど、しっかりと間合いをとっていた。隼が近づいても逃げられるだけの間合い。間違いない、隼は思った。何かを疑われている。

「な、なにもやってないです」

「嘘をつくな。お前、誰だ？」

少女は俯いている。俯いたまま答える。

「リーフリット、と、申します」

「それで、お前は何をしているんだ」

話しながら、隼は“見る”。電流に阻まれてしまう。隼は二通りの方法を考えた。ひとつ、人気のない場所に連れ込み、脅迫する。ひとつ、念入りに彼女の心に入り込み、良い人のふりをして温和に聞き出す。

だが、リーフリットは隼が考えているさなかにじりじりと距離を離す。それを見て確信を得た。考えていることが“見られて”いる。全てを見られているのなら、こうして考えていることも見られているということだ。隼は緊張の中にいた。どこまで見ているのか。それさえ隼には分からない。

少女は依然、俯いたまま口を開く。

「見ているんじゃないくて、読んでいる、んです。あと、わたしは、あなたが困っていたので、手助けしたいと、思っただけで、別に、嫌がらせをしているわけじゃ……ひっ！」

あまりに不明瞭というか話すのが遅いので、隼の表情に鬱屈した内面が表出していた。リーフリットは更に俯く。

話が進まない。

隼は自分を騙してひとまず落ち着かせた。

心を無にするように心がける。それが本末転倒であることに気づくのに、そう時間はかからなかった。

この様子だと全て知られている可能性はなさそうだ。自分のしようとしていること。その手段まで知っていたら、どうなっていたことか。

問題なのは、どこまで読まれるか。単純に考えたことを読まれるのか、思ったことや記憶の隅々まで読まれるのか。隼の答えの見え方の起動方法を“スイッチ”と例えるなら、彼女はそもそも起動方法が存在していないのかもしれない。

つまり、隙がない。

常時発動している、思考を読み取る“目”。

だが。

熱心に頷くリーフリットを見て、隼はほっと撫で下ろした。
なるほど。

アタマが悪いのか。

「ち、違います！ 悪くないです！ これでもわたし……っ！」

「分かってるよ、大丈夫大丈夫。強く言って悪かったな」

「分かってないです！ 全然分かってないです！」

自分のペースに入り込むと、なかなかに饒舌になるようである。
隼の考えることに一々反応するため、何が分かっている何かが分かっているのかは非常に分かりやすかった。

「それで、教えてくれないかな。なんで俺の考えていることが分かる？」

「う、生まれつき」

生まれつき周りの人の考えていることが読み取れていた。

「俺が君の情報を引き出そうと、考えを読もうとしたとき、君は何をしたんだ？」

「その、何か入って来たから、来ないでって」

そうして絶句する。

隼には何を言っているのかさっぱりだった。答えの見える力を持つ人間は、隼の知っているところ、二人いる。アルフレッドとオッド・クラフティは、そういった表現を使っていなかったし、“見えて”いた。

しかしリーフリットは違う。拒絶できる。隼の力の侵入を拒絶することができる。

心が躍った。

「そうか。よく分からないけど、すごいね、君」
「そ、そうかな」

警戒を解くためとはいえ、それは紛れもない本心だった。すごい。すごい収穫だ。いくらオッド・クラフティといえど、これには敵わない。対峙することすら危うい。

答えの見える力を拒絶する力。今回はかりは前空春花のうっかりに感謝しなければならない。

「それで、リーフリット。なんで俺が困っているって？」
「第七艦隊の人が立ち尽くしてるから、何かあったのかな、って」
「ああそうだ、何かあった。実は新型メールのお披露目会に行くはずが、置いて行かれてしまったんだ」

相手の心に踏み入るためには、まず自分からへりくだる方がずつと簡単だ。社会のルールを思い出して、隼は微笑の裏側に嘲笑を隠す。

リーフリットは少し緊張が解れたのか、ほのかに笑って答えた。

「イギリス、ですか？」
「みたいだ。詳しい場所は分からないけど」

すると彼女は踵を返して歩き出した。歩いている彼女をじつと見つめる。彼女は立ち止まって振り向いた。

付いて来いってことだろう。隼は分かりにくさに辟易していたが、この際である。忍耐力を養うべきだろう。

しばらく歩き続ける。会話はなかった。かといって隼は気まずさなど感じようもない。元々リーフリット、彼女は話すのが得意ではないと見える。

歩いていくうち、景色は見たことのない場所へと変わっていく。入り組んだ道を通って、人気のない廊下に辿りつく。ようやくリーフリットは立ち止まった。

「も、もう少し近づいてください」

頬を染めて恥じらいながらリーフリットは手招きする。とはいえ、周りに何があるというわけではない。仕方無しに近寄ると、リーフリットはポケットから通信端末を取り出して、長いケーブルを壁に突き刺した。

壁の一部分が扉の形に浮き出る。どのようなトリックなのか、隼には分からなかったが、あまり関係のないことなのであえて気にしないことにした。

扉を開けて、薄暗い通路をぐんぐんと進んで行く。

やがて広間に辿り着いた。

いや、広間ではない。

「工場？」

隼の第一印象はそれだった。

分解された機械のパーツの山。工具の山。本の山。

そして中央に座する、翠色のメイル。そのメイルは歪な形をしている。繊細で華麗なフォルムの>クォークとも、EEの堅固な印

象を持つMHDとも、オッドークラフティが駆る>レプトン<とも異なる機体。

肩部には強固かつ巨大な実体盾が装備されている。脚部にはブースターが複数付属してあった。速さと防御性能を兼ね備えた機体。隼はリーフリットを見た。

恐怖は覚えない。

むしろ、感動にも似た何かを感じていた。

リーフリットは振り向く。

前髪の奥の瞳が、翠色に光っている。

翠色の機体を背にして立っている。

「わたしの秘密工房、です」

「お前が作ったのか？　ひとりで？」

取り繕うことも忘れ、隼は尋ねた。何度も頷く様子を見ると、それほど自信があるらしい。

しかしその自信に相応しい出来栄である。翠色の、鎧を着たような機体。紅いモノアイが光り続けていた。

「お前、誰……何者なんだ？」

躊躇が見られた。リーフリットは答えたがっていない。それでも隼はじつと彼女を見続けた。その熱意に観念したのか、リーフリットは小さく口を開く。

「リーフリットⅡバズレール、です。スコアセカンド、でもありません、一応」

スコアセカンド。二位。アルフレッドⅡロスチャイルドに次ぐ人物。人の思考を読み、人からの干渉を拒絶することが出来る人物。

隼は前空春花に改めて感謝した。

「これ、人の目に晒していいのか？」

「大丈夫、です、だと思います、たぶん」

自信のなさは相変わらずである。

イライラして、隼はついしくなくてもいいはずの助言をしてしまった。

「もっと誇ればいいだろうに。これは並の人間に出来ることじゃないよ。俺にも出来ない」

顔を俯かせて、彼女は顔を真つ赤にする。評価されて然るべきだ。メイルの仕組みを分かる人間は極少数、もしかしたら設計、起動までやってのけるのは前空春花のみかと考えていた隼にとって、これは驚くべきことだった。

たかだかGESのスコア上位者程度が、“見る”ことも出来ないメイルに関するシステムを把握し、実際に作れてしまうなんて。

「エネルギーの補給はしてありゆ、あります。後部座席は用意してません、けど、たぶん乗れます、大丈夫です。すぐにでも出発できます、」

「俺は日雀隼だ。クオーク機のパイロットをしている。よろしく、リーフ」

彼女は違う。

大衆に吞まれ、流されているだけの人間とは違う。

自分の意志で、自分の心で判断し、上り詰めた人間だ。その彼女が答えの見える力を拒絶できるのは、ある意味当然と言えるかもしれない。

もしかしたら、彼女は答えの見える力を持たぬまま、隼と同じ志を持っているのかもしれないのだ。

そう、隼はリーフリット「バズレール」に期待している。新しい可能性というものを期待してしまっている。愚かにも。

「よ、よろしくお願いします、しゅ、しゅしゅ、隼くん」

「そんなに畏まるなよ」

リフト台に乗って翠色のメイルに乗り込む。コクピットは二人入っているせいか、やや狭いように感じた。リーフリットは座って、設定を終える。

彼女は目をつむっていた。

それはまるで、祈るように。願うように。小さな唇で紡ぐのは、彼女の言葉という力。

「起きて、>ゲリユオン<」

メイルが起動する。

>ゲリユオン<は起動する。

秘密工房と称した工場の天井部分が自動で開き、>ゲリユオン<のブースターが展開した。

強烈な負荷がかかって、機体が空に浮かび上がる。いや、違った。これは跳躍だ。足元に電磁斥力エネルギーの磁場を展開させて、それを伝って空中を飛ぶように走っている。

「リーフ、GESのセキュリティは問題ないのか？」

「たぶん」

「あるんだな？」

沈黙を肯定と受け取って、隼は通信端末をオンにした。通信相手

はシェーラ＝マクファールンである。

つながったとたん、慌てたような声が聞こえた。

「少尉、どこにいるの？」

「今、GESの内部から所属不明の機体が出動したはずです。それに乗っています。御安心下さい。スコアセカンドと共にイギリスまで行くつもりです」

「そんな無茶なこと！ 海を渡るの？ どうやって！」

「出来るみたいですよ、通信替わりましょうか？」

通信の向こうが沈黙していた。諦めが付いたのか、シェーラのため息が聞こえる。

「分かったわ。あなたたちの出撃を許可しておきます。民間人を危険にさらさないよう、十分配慮してください」

「了解です」

通信端末をしまつて、隼はリーフリットの方へ向き直った。

「だそうだ」

「あ、その、あっ、ありがとうございます、います」

「いつまで緊張しているんだ？ 遠慮しなくていい。お前と俺は同じだから」

隼がそう言った直後、>ゲリユオン<の機体があくんと重力に従って下降した。機体制御をミスしたのだろう。予測の範疇であったため、隼は操縦桿を握る彼女の手に自らの手を重ね、思い切り引く。機体が地面と垂直になって、機体下部に電磁斥力の足場が発生した。着地して、跳躍する。

「い、いきなり恥ずかしいこと言わないでください!」

「言ってないよ。それより機体制御に集中した方がいいぞ。また『転ぶ』から」

隼は楽しんでた。

自らの役割も忘れ、使命も忘れ、任務も忘れ、ただ楽しかった。生きてきて、初めて会うことが出来たのだ。

希望の持てる人間に。

「このシステムはお前が考えたのか?」

空中を跳躍しながら、>ゲリユオン<は最高速で英国へ向かう。

隼はリーフリットからできるだけ多くの情報を引き出そうと試みることにした。

リーフリットはまだ躊躇いがちに、恥じらいながらぼそぼそと答える。

「う、うん、そうです」

「メールのシステムも理解しているのか?」

「は、はい。前空さんに少し教えてもらって、あとはメカニックスの知識を読み取って」

「そんなことも出来るのか」

「元から、元から、その、機械を分解するのが好きで、廃棄処分の機体を集めているうちに、いつの間にか……」

知識を読み取る。恐らく彼女の能力はそれだ。考えるではなく、知識を読み取る。感情ではなく、思考を読み取る。記憶を読み取っているのだ。ただ、浅い部分は無意識に拾ってしまうが、深い部分ともなるとそうはいかない。

完全に隼は想像で考えていたが、リーフリットが訂正しないところ

ろを見ると、どうやら正解のようである。

そこまで考えて、隼ははっと気が付いた。

知識を読み取ることが出来る。

記憶を読み取ることが出来る。

つまり、それは。

「リーフ、向こうに着いたら、頼みたいことがあるんだけど」
「は、はい？」

隼は彼女を利用することしか考えていなかった。

ようやく出会えた、出逢『得た』希望を。

いつかいずれ後悔すると、知っているにも関わらず。

8 価値のないものたち

アルフレッド＝ロスチャイルドは退屈していた。

新型機体のお披露目会というお題目だが、実際はスコアトップを監視下に置く為の儀式である。世界中に点在するGESの重役に日本のスコアトップたるアルフレッドこそが最も優秀だと表明しているのだ。

そうすることにより、アルフレッドは注目を浴びる。監視が強化される。よほど優秀な人材を手放したくないようだ。しかしこういった逆境が、自らを縛り付ける鎖がアルフレッドにとっては快感に等しい。

眼下の機体を見る。

出力は>クオーク>以上、機動性において>クオーク>より劣るが武装の豊富さで上回っている。なにより耐久性が高い。

ところがアルフレッドは気に食わなかった。

GESの重役はこう言っているのだ。

この援護向きの機体で、“白き鷹”日雀隼を援護せよ、と。あるいはこうも言っている。

その身をもつて、GESの盾となれ。さもなければ死ぬ。

被害妄想も甚だしい、とアルフレッドは思った。だが自身が持つ能力によって被害妄想が事実として固定されてしまう。GESの重役は自分たちのことしか考えていない。世界平和というのは建前で、自分に利益があるから、自分が不利益を被らないために戦っているだけなのだ。

理想とは。

正義とは。

こつも虚しく、大衆と欲望の前にひれ伏してしまう。

「アルフレッドくん、おめでとう！」

「君にはこれからたくさん働いてもらおうとしよう。はっはっは」

今はただ、自分を取り巻く全てが鬱陶しくてたまらなかった。せめてあの少年がいれば少しは退屈が和らいだらうか。ふ、と柔らかく微笑んで、アルフレッドは会釈した。

A x i o n T r i g g e r アクショントリガー

8 価値のないものたち

リーフリット、バズレールと日雀隼は遙か上空を駆けている。出力は安定しており、テスト飛行 この場合、歩行というのだろうか だということにも関わらずこれといった問題点は見当たらない。

起動実験というのは重要である。データは所詮データであり、実際に運用しなければ分からないことの方がむしろ多い。経験に勝る知識など結果的にはない、ということだ。最も隼やアルフレッドのような特別は例外だが。

その実験もなしに、>ゲリュオン<は起動している。問題すらなく。

それがどれほど恐ろしいことなのか、隼はよく知っていた。メイルの操縦経験がない状態で敵機を殲滅し、初めて搭乗する実験機を

駆り敵艦を撃墜し、自らの手足のように扱った隼だからこそ理解している。

答えの見える力なしにはありえない、ということ。

だから彼女の能力は本質的に答えの見える力と同義なのだ。ただ、幅広く“見る”隼に対し、彼女のそれは人の記憶領域にほぼ作用する。

つまり答えの見える力には個人差がある、と隼は仮定した。そう考えて見ればオッド・クラフティがNEOデバイサーについて知っているのも納得出来る。隼は相手の行動予測に偏っていて、彼は知識面に偏っている。

限りなく正解を導き出すことの出来る人間。

正解による正解の連続。

そうして創り出される、正しい世界。

いくなればこの機体はややリーフリット好みにカスタマイズされているとはいえ、>クオーク<より遙かに正しい機体だと言える。

「リーフ、君、趣味はなんだい？」

「あ、え？」

少し脳の回転速度と注意力、言語領域に損傷があるようだが。

「ど、読書、です」

「……企業面接じゃないんだ。普通に答えてくれていいよ」

「本当に読書なんです！　なんで疑うんですか！？」

隼は笑みを見せた。共感相手がいる、というのは心の栄養になる。彼女であれば軽口さえ叩ける。それは彼女と自分が同類に他ならないからだ。

オッド・クラフティは隼のことを同族と呼んだ。間違っではない。答えの見える力を持っている者同士、という意味では同族だ。

しかしながら隼は彼に共感できない。彼らには隙がなく、人間味がない。彼らは理屈で判断している節がある。そして自分を絶対的な正義だと確信している。

自分は違う、と隼は思っていた。

自分がしているのは倫理的に見れば惨いことだ。許されることではない。ところが隼は今の世界が気に食わない。気に入らない。嫌いだ。だから変える。その力があるから。感情で判断している。そして自分は独善的だとも思っている。

リーフリットはそういう意味で、限りなく自分に近かった。

自分に出来ることの究極を求める。

同類。

だからだろう、と隼は確信を得た。彼女の隣にいと安心を覚えている。それは彼女の明確な意思によって答えの見える力を拒絶されているからでもある。彼女には意志があり意思があつて、能力がある。

「あと、あとは、メカを作ったりバラしたり」

「どんなメカを作るんだ？」

「あ、あんまり話しかけないでください……一応初操縦なんです」

「いざとなったら俺が　なんだ？」

唐突に機内にアラートが響いた。隼が気づくよりも速く、リーフリットが応答する。

「イギリスのGES部隊、です。機体数は六、かな？　うん、そうです。ど、どど、どうしますか？」

「通信出来るならしたい」

「通信！　通信ですか、繋がります」

リーフリットは慌てて通信装置をオンにした。空中に静止する。

隼は瞬時にGES部隊の情報を“見る”が、情報を引き出す前に再びアラートが鳴り響いた。

>ゲリユオンくが空中を跳び回る。電磁レーザーによる攻撃だ。全面展開式のモニターに射撃した機体の姿が映っている。隼は舌打ちした。

「こちらGES日本本部のスコアセカンド、わけあって識別コードを搭載していない！ 第七艦隊のシリンドゥウェイカー少佐への取次を希望する！」

『認可できない。立ち去れ。さもなくば敵機とみなし撃墜する』

頭の堅い！ 隼が煩わしさに不快感を露呈していると、>ゲリユオンくの機体がぐんと高度を落とした。

異常が発生したのかと隼は動揺したが、機体は制御を取り戻し、かと思うと空中を疾走していく。直線的な動きであるにも関わらず、敵機の電磁レーザーは一撃たりとも命中していない。

とっさに隼は理解した。照準がずれているのだ。>ゲリユオンくの速さにGES部隊の性能が追いついていない。

「このまま突破します」

「は？」

普段の彼女からは想像もつかない冷酷な声でそう告げた。

同時に機体が空中を滑走する。見えないレーンでも付いているかのようだった。下降しながら左右に揺れて追撃のレーザーをかわしつつ駆ける。

（万能だな！ 電磁斥力の磁場は！）

『止まれ！ 撃墜するぞ！ くつ、本部へ要請を！ シリンドゥウェイカー少佐の名を騙る所属不明機が本国へ向かっている！』

「撃墜する？」

ふっとリーフリットが嗤う。

「試されたいんですか、>ゲリユオン<の性能？」

「待て待て、こちらはシ lindo ュエイカー少佐直属の日雀隼特別少尉！ 急ぎの用がある！ これ以上妨害を続けるのであれば撃墜もやむなし！」

リーフリットの豹変ぶりに驚きを隠せない隼だが、何となく彼女から滲み出る人間味に強烈な親近感を感じてしまい、すかさずフオローを入れる。

『身元を証明するものを提示しろ！』

「シ lindo ュエイカー少佐に確認を取れ！」

『認可出来ない！』

「くそ、面倒な！ リーフ、通信を切れ！ あいつらを黙らせ、」

最後まで言い切る前に、>ゲリユオン<は跳躍した。がくんと機体が揺れて隼は後頭部をぶつける。

「>ゲリユオン<、スラスター全面展開。脚部磁場発生装置を全力稼働。最高速！」

機体のスラスター・ブースターが展開し、電磁斥力エネルギーによつて生み出された強大な出力が空を切る。

そのまま最高速で滑空して行く。遙か後方にG E S 機が見えた。機動性がどのという問題ではない。速度が違う。>クオーク<が器用な機体だとしたら、>ゲリユオン<は不器用を代償に機体出力を向上させているのだ。小回りの効く機体ではない。単純な力押

し。

しかしこの場合において、GES機を振りきれるといいうのは大きな利点である。

感銘を受けるとともに頭の堅い連中に呆れ、最終手段を使うしかないと諦める。隼は通信端末を開いて、繋がれと念じて前空春花に連絡を取った。

新型機体のお披露目はパニックに陥っていた。無理も無いことである。所属不明の機体が会場へ向かっているというのだ。考えられる敵の目的はいくつもある。重役の排除、新型機体の強奪、エトセトラ。そのどれでもないのだが、GES部隊の頑なな態度によって事態は大事と化していた。

慌てふためいた重役たちが警備の者に囲まれながら逃げ去って行く。

アルフレッド「ロスチャイルドはくつくつと笑って、青い機体を起動させる。緊急時にそなえ待機せよ、という命令によるものだが、彼はしっかりと真実を理解していた。

（百発百中の“翠嶺” リーフリット「バズレールか。どういう組み合わせだい？」）

スコアトップである彼の能力をもつてしても、スコアセカンドに大差を付けているわけではない。

総合成績では辛うじて上回っているが、リーフリットの実力は、射撃の腕前に限ればアルフレッドは愚か日雀隼さえ超越している。

プライドをかなぐり捨てて断言できるほどそれは確かな事実だった。ただ彼女は他人を拒絶している節がある。チームワーク、近接戦闘、信用においてアルフレッドにはおよそ届かない。

だからこそ疑問だった。他人に心を開かない彼女がどうして日雀と共にいるのか。

（もしかして、僕の期待は的外れではないのかもしれないな。だが、せつかくだ）

眼前に遠くそびえる、翠色の機体を見る。

>ゲリユオン<には彼女自身の“拒絶する能力”が付与されていた。情報はない。しかし敗北の予感は無かった。いずれにせよ余興だ。せいぜい楽しませて貰うとしよう。

アルフレッドⅡロスチャイルドは>ハドロン<を駆る。

青い機体の二つ目が瞬いた。

「来ます」

隼は頭を抱えた。前空春花は予想通り連絡が取れず、シリンドⅡウェイカーにはそもそも通信さえ通じていなかった。非常に面倒な状況で、更にアルフレッドⅡロスチャイルドは戦闘態勢に入っている。

半ば相手の考えていることが理解できるだけに、隼は余計頭を悩ませる。

だが収獲はあった。

リーフリットⅡバズレールの記憶を読み取る力は答えの見える力とは異なり、物理的距離が離れていると作用しない。故にリーフリットは既に戦闘態勢に入っていた。アルフレッドの思考を読み取る事が出来ていない為だ。

答えの見える力で、隼は青い機体の性能を“見る”。

単独戦闘には向いていない。近距離戦闘にも向いていない。特殊

武装はない。機体性能が>ゲリユオン<に劣っていた。

「リーフ、アルフレッドは気づいているぞ」

「え？」

言われて、リーフリットは目を瞑る。彼女のしようとしていることが見えない為、隼は一寸戸惑ったが、すぐに理解した。相手の思考を読み取っているのだ。

なんてことだ、と思った。

隼の仮定は間違っていた。物理的距離が離れていると作用しないのは無意識による思考の読み取りだ。意識的に見ることで、リーフリットは相手の思考を読み取ることが出来る。

答えの見える力に劣らない、むしろ戦闘において答えの見える力よりも脅威になり得る力である。

すぐにリーフリットはアルフレッドの考えていることを理解した。

「え、え？ ど、どうでしょう、どうしますか!？」

「やるしかないだろう」

「そう言っても！ あい、相手は、スコアトップでっ！ ……す！」

そう、これは余興だ。アルフレッドにとってこれは単なる遊びではない。シミュレーション上の戦闘となんら変わりはない。>ハドロン<の性能を試すだけの予行演習でしかないのだ。

「>ゲリユオン<の性能はあんまり見せるなよ、リーフ」
「わ、わ、分かりました」

>ハドロン<が>ゲリユオン<へ向けて駆ける。距離を離すのは得策ではないと考えたのだろうか。確かに>ゲリユオン<は外見だけを見れば>ハドロン<と同じ援護型の機体だと思える。

電磁レーザーを射出する。青い機体の右腕に装着された電磁シールドはレーザーをいとも簡単に防ぎ、空中を走る>ゲリユオン<へ向けて電磁レーザーを発射した。

「新武装か」

従来の電磁レーザーとは異なる、従来の電磁レーザーよりも強大化、巨大化したレーザーが>ゲリユオン<の目の前を過ぎる。

「当てるつもりがありませんね、スコアトップ」

思わずどきりとして彼女の方を向いてしまうのは、未だその豹変に慣れていないからだ。多重人格者かと錯覚するほどの集中力と注意力。普段の彼女は思考を読み取る力の方向性が一定ではないため多くの情報に惑わされてしまっているのではないだろうか。隼は推理した。

機体が大きく揺れる。急速下降しているのだ。>ハドロン<が電磁レーザーを放つ。>ゲリユオン<は応じず、当たりもしない弾を避ける。

余興どころか、大道芸である。

>ゲリユオン<が跳躍し、青い機体の上部に張り付いた。その機体に小型電磁レーザーの砲口を突きつける。>ハドロン<がその射出をシールドで防ぎ、レーザーで一蹴する。

空中で回転しながら>ゲリユオン<は体勢を整えて着地した。

『余興は終わりにしよう、白き鷹よ。いや、操縦者はリーフリット
|| バズレールか』

「やっぱり分かっていたみたいだな」

通信をオンにして隼は答えた。

『ご覧いただきありがとうございます、いかがでしょう。GES本部のスコアトップとスコアセカンドが駆る専用機でございます。余興にお付き合いたいだいて感謝いたします』

>ハドロンくが紳士的に一礼する。

元はといえばGES部隊が確認作業を怠ったからなのだが、隼は事態がなんとか収まったことに安堵した。

「困惑させてしまって申し訳ない。部隊への伝達が上手く行かなかったみたいでしてね。いや、彼女らに協力を仰いだのは僕ですよ」

アルフレッドが都合の良すぎる言い訳をしている間、隼はリーフリットと共に第七艦隊にいた。重役の多い会場において隼は少し有名にすぎる。電磁斥力エネルギーの開発者としての側面と、実験機>クオークくとしての側面すら持ち合わせているのだ。目をつけられたらたまったものではない。

会場に参入し第七艦隊に>ゲリユオンくを収納させた後、二人は艦のブリッジにやって来ていた。

「悪戯が過ぎるぞ、少尉」

「申し訳ありません、少佐。確認の指示を出したのですが認可できずの一点張りだったため突破しました。責任は自分にあります」

敬礼しつつ体裁を繕う。シリンドゥウェイカーは私情から叱責したのではない。単に立場上そう言って置かなければならなかっただけである。そしてそれを分かっている隼は彼の行動に合わせた。

首を横に振り、シリンドはリーフリットに一礼する。

「バズレールのご令嬢か。お初に相まみえる。私はシリンドゥウェイカー少佐であります。第七艦隊の艦長を務めさせていただいてゐる」

「こ、こんにちは……」

隼の背に身を隠しながらリーフリットは小さな声で返した。その様子を見て、何かの気を回したのか、前空春花が慌てて口をはさむ。

「わ、私が通信に気づかなかったのが原因ですから！ 日雀くんもバズレールさんも気にしないでね！」

「准尉は会議中であらせられたのです。何を庇護する必要がありますありません」

突然の参入者に隼は眉をひそめる。リーフリットが肩を竦ませたのを見逃さなかった。シリンドは敬礼し、隼もそれに習う。

たつぷりと髭をたくわえた老人であった。いや、老人というには若い。シリンドよりやや上といったところだろう。

軍人ではない。

何らかの特権階級である雰囲気醸し出していた。

「君が日雀隼特別少尉かね。確か任務中のコードはホワイト少尉であつたか」

「はい」

「オーギュスタン・ロドルフ・バズレールと申す。十年になるか、君は変わらぬな、日雀少年」

「授賞式の？」

「ああ、そうとも。授賞式以来の邂逅だが、私は君が再びこうして表舞台に出て来ると信じて疑わなかった。娘が世話になったようだ」

彼は苦笑を浮かべて礼を言った。リーフリットの実の父親だろう。だというのに彼女はやや気後れしているふうがある。父親が苦手なのかもしれない。

「いえ、助けていただいたのはこちらです」

「そうか。いや、これから娘をよろしく頼むよ。そうだ、積もる話もある。少し少尉を借りていいかね」

「ええ、それは構いませんが」

「行こうではないか、少尉。話がある」

隼は警戒しながらおくびにも出さず、微笑んで頷いた。

ブリッジを出てしばらく歩く。会場内は西洋風に彩られていた。有名な画家が書いたであろう絵画が飾られ、その道をゆったりと歩いている。

沈黙を破ったのはオーギュスタンだ。

「答えの見える力、と言ったかね」

「どうしてそれを？」

隼は驚きを見せずに尋ねる。重ねていうが、答えの見える力は相手の考えていることが分かるわけではない。出来ることは二つ。相手の行動予測と、情報の真実を知ること。故に相手が何を考えているのかは察するしかない。

オーギュスタンの表情は彼の大きな背中の子で見られないが、その声色から陰しいものであることがうかがえた。

「娘があの様子だ。それに知人に一人その力を持った子がいてね。あの力には手間をかけさせられたよ。なにせ解析しても何一つ分からない」

「娘さんを実験台に？」

「脳波を解析したが、無駄だった。答えの見える力、君たちは決ま
ってそう呼称している。まるで誰かに答えを教えてもらっているか
のようだ」

君たちというのが、シリンドが言うところの当時いた天才とイコ
ールだとすぐに気が付く。当時いた天才という情報では情報量が少
なすぎて答えを見ることすらかなわないが、あるいはオッド「クラ
フティであれば見えるのであろうか。

「君たちの使うそれは、何なのか。私は知りたくてね。研究者には
研究者のプライドってものがある」

隼は理解した。オーギュスタンの真の姿は娘思いの父親でも、G
ESの出資者でもない。分からぬものを探求するサイエンティスト
である。

「僕が話すとお思いですか？」

「取引ということではいかがか。私は君に無償で技術を提供しよう。
メールの廃棄品か、新型電磁レイザーの技術情報か、金でも構わん」
「何でも良いので？」

「ああ、私は真実を究明する者だ。真実さえ分かればいい」

この親にしてあの子あり、という言葉を隼は思い出す。なるほど
似ている。技術者としての志がそっくりである。

その印象はリーフリットは確かにオーギュスタンの娘だと確信す
るに足るものだった。当時いた天才　とのコネクションが欲しい
という側面もあるはずだが、最もな理由は技術者として真実を知り
たいという知的好奇心だろう。

ならば話が早い、と隼は考えた。

「答えの見える力というのは、いわば計算式の答えをわずかな情報から導き出せる能力です」

「ほう？」

「一プラス一は二。この一さえ分かれば答えが見える。あなたの名前さえわかればあなたの職業、立場、しがらみが見えて来る。あなたの欠点、そしてこれからあなたがどういう行動に出るかさえ予測できる」

究極的な予測能力。

答えの見える力とは予測が真実に直結する力のことだ。

「やってみたまえ」

「オーギュスタン」R「バズレール。富豪バズレール家の主。各国の有力な政治家にコネクションをもち、GESの出資者も兼ねている。妻が一人。最大の出資者であるためメールの技術にも深く携わっている」

「やはり素晴らしいな、君たちは。私の娘がその一員であることが誇らしいよ」

それで、と彼は続ける。

「先払いとはいささか無礼ではないかな」

「失礼を」

「まあよい」

そう、彼がしっかりと対価を払うと分かっているからこそ、隼は真実を教えたのだ。

故に隼は答える。

「何が欲しい。金か、名誉か、地位か、技術か情報か。際限はない。」

「選^びたまえ」

「本当になんでもよろしいですね」

「構^わん」

「では」

他の全てに興味などなかった。

今、必要な駒は。

たったひとりだけなのだから。

「あなたの娘を下さい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2195m/>

アクショントリガー

2011年2月12日11時22分発行